

時報

No.14

大阪大学山岳会

誤字訂正

誤

正

目次
ラタンヒマル
ガネツヒマル

ラタンヒマル
ガネツヒマル

P1 18 末端

末席

P9 右 15 考

変

P29 左 11 関西登山会

関西登高会

P31 右 12 止血を

止血に

P43 左 16 切手

切手

P77 右 15 了りなきミシク

了りなきミシク

時 報

No. 14

1966 9

大 阪 大 学 山 岳 会

大 阪 大 学 体 育 会 山 岳 部

山岳部と留年問題

会長 篠田 軍治

最近学内で留年学生が増加したことが各方面から注目され、問題になっている。以前は数パーセントに過ぎなかつたのが、今年は30パーセントを越えるような有様でまことに不幸なことである。このことは山岳部の部員でどうなっているか適確にはわからないが確かに以前よりはふえている。旧制高校時代には学年制であつたから留年と言わずに落第と言つていたが実質は同じである。これが今の留年よりもパーセンテージは高かつた。また山岳部という授業期間中に山行もするので落第の率は確かに高かつた。

今の留年問題にしても、部員の中に留年者がいるということは別に大して問題にはならない。学部でも同じ留年組でも体育会の方の仕事に熱中したため留年者は概して評判がよいが、問題は留年学生激増の原因とどう結びつくかということである。

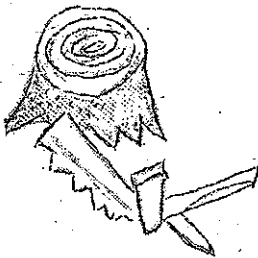
留年学生激増は明らかに学力が低下したためである。なぜ学力が低下した

か、いろいろな原因があろうが、指摘できることは自主的な勉学能力がなかなか身につかないことである。大学入試までは与えられたコースをそのまま歩むだけでよかつたが、大学へ入つてからは自分で自分の進む道を見つけ、また開いて行かなければならない。言わば大学入試まではハイキングのように指導標に従つて、その通りに歩いて行けばよかつたのが、大学へ入つてからは登山になるので、自分で自分のルートを見つけ、登攀の技術も身につけて行かなければならない。ハイキングでは指導標の不完全や誤りが問題になるが、登山では始めからこんなものは無いのだから問題にならない。

大学は登山のようなものだとしたら、ルートはどうして見付けるか、実際の登攀はどうするかということとは基本を教わるだけで、個々の場合については各人の創意工夫が要求されるわけである。そのような世界に

入つてもなお指導標を求め、はつきりした道を要求しているようなことが今の大学生の中に多いように思われる。言わば大学に入つてもなかなか大学生になりきれない学生、山岳部に入つてもなかなか山岳部員になりきれない者がふえているのではなからうか。体育会の場合、性急に部員らしい

ものにしようとする、勢いしどきが現われたりする。新聞紙上に現われるようなしどきは論外だが同時にこれはあまりにもイージーゴーイングなやり方である。部員を育てて行くのは確かに以前よりむづかしくなつた。充分に腰を落ちつけて大学らしい創意工夫をこらすべきではなからうか。



目次

巻頭言 (篠田軍治) 1

山行記録

64年度総括報告 (リーダー名) 7

64年度夏山——於立山内蔵ノ助平 10

64年度冬山——立山大日尾根ポラー 17

64年度春山——赤谷尾根より剣岳ポラー 26

64年度個人山行記録 48

65年度総括報告—— (リーダー名) 51

65年度夏山——於剣岳二股 53

65年度冬山 61

① 樽池新人合宿

② 大沢尾根—鹿島縦走

③ 燕——常念縦走

65年度春山——双六から立山縦走 67

65年度個人山行記録 77

O. B 寄稿

I 登山と高圧酸素手術室 95

II 富士山の一年 97

編集後記

..... 102

1 9 6 4 年 度 記 録

C . L 牧 野 大 輔

S . L 吉 川 信 也

リーダー所感

— 39年度を顧みて —

牧野大輔

あの富士山での苦い経験を契機として、我部では過去の富士山に致る迄の事故の分析を行い、富士山での事故が唯単なる偶然に起因するものではなく、何か深い根をもつたものによるのだということが結論され、この根を絶ち切るべく失敗の原因を基盤として確固たる部活動を目指して再出発したのであつた。

再建の第一歩の目標は山行に於て事故を起こさないこと、否事故が起きないことを前提として山行を行うことであつた。従つて極端な表現を使えば、山岳部としての目的は登山そのものにあるというより、登山により事故を起こさないということにあつた様に思える。実際に遭難を経験し、またこの様な環境で育つてきた我々は、遭難が絶対的な悪であり、遭難は絶対に起こしてはならないこと、従つて遭難の危険性のある山行はすべきではないことというよりな考え、自然に植えつけられ

もし、また自分なりに考えてこれを最良のものと思ひ、リーダーとしても何よりも先ず安全性を第一の目標として全ての活動を行なつてきた。しかしながら、我々のようにこの考えを或る程度無批判に絶対的なものであるとして受け入れてきたものにとつては、この考えは大きな落とし穴であつたのである。即ち、本来の純粋な登山というものを認識する時、登山がこのような額縁におさまり、額縁からちよつとでもはみだすと忽ちにしてちよん切られてしまふようなものでは決してないのである。眞の登山の姿とは、過去の古き岳人達の教えるように、人の心におのずと湧き出てくる自然或いは未知のものへの憧憬と畏敬が山と直接接触する時点に於て成り立つものであり、その間にはいかなる形であれ、人的な要素の介入は許されないのである。然るに我々がもうけたところの額縁がまさしく、ここに介入する大きな人的要素の一つ

なのである。この要素を小さくしていけばいく程真の登山の姿に近づいて行くのである。ところが大学山岳部が大学という非常に公共性の強い組織に属している限り、個人或いは個人の集まりに比べて、非常に大きな社会性を有しているのでありこの社会性と先に述べた自然と人間との間に介在する人的要素とは表裏一体をなすものであり、ここに大きなジレンマが生じてくるのである。このジレンマを解決する方法は唯一妥協しかありえない。ではこの妥協点をどこに求めるか、いかえればどの程度の社会性を介入させればよいのか。この介入の程度と技術的な実力との組み合わせにより山行の形態困難さ、対象が決定される。一つの山行を前にしたとき、その時点では実力は定数であり、従つて山行を決定するのはこの定数に掛けられるべき社会性という変数なのである。従つてこの定数と変数とを正確に把握することこそリーダーシップをとるものが最も努力すべき点であり、また実際我々はそのような努力を行なつてきた。ところで我々の求めた妥協点は果たして適当であつただろうか。現在の部の状態をみるときそれは否と答えねばならない。我々の求めた点は低すぎるような気がしてならない。一つの山行に対する最

初の動機はひどく純粋なものにも拘らず、それを部の対象とするときいつのまにかこの純粋な動機が前に述べた社会性ともいうべきものにとつてかわつてしまつていたのである。このような結果が何を招くかは明白である。計画のための計画、山行のための山行がそれでありひいては個人の山に対する意欲を減退させ、ついには部全体が自由な考え、山行に対するバイタリテイに欠けた何ら発展性の認められない消極的なマンネリズムに陥るだけである。我部についてみると、事故の前と後とではこの点について非常に大きな落差が感じられる。今後の部の発展を考えるとこの点について十分な結果を出しておく必要があるが、現役だけでは少々困難な問題でもあるまた考えも偏よつてしまう可能性もあり、先輩の参加が切に望まれるところである。

こと教年来学生山岳界に於て合宿主義の是非ということが大きな問題となつている。大学山岳部は一つのチームを作つており、従つて実際の行動もチームプレーになり、ごく自然な成り行きとして合宿主義に落ち着いてゆく。我々がリーダーシップをとつた際には、部のおかれた状態から極く自然に合宿という形態にゆき、そのことに何の疑問も抱かなかつたし、また現在でもそ

れを反省してみても当時としては適切なものであつたと考えている。然るに合宿という形態の是非はその時その時の部のおかれた状態の是非、山行の性格に左右されるものであるが、現在の部の状態をみてみるとこの形態の影響がネガティブな作用をしているように思える。合宿主義の弊害というと今迄にも何度もいわれてきたような、個人の疎外、ひとかたまりのリーダーグループの下に働くポーター的部員の存在、個人の實力の過大評価等が考えられるが、現在の部を眺めてみると、個人の

力の伸長ということが部活動の下に埋もれてしまつていふようなことはないであらうか。特にリーダーシップを握つた者にとつて、彼等の力の育成なくしては如何に新入部員の訓練が十分であつても、部活動の進展はみられないだらう。

以上ありきたりのことを思いつくままに書いてみたが、事故の後の部の行き方が決して適切ではなかつた事は確かであり、この解決に向かつて現役、OBが一体となつて努力すべきであらう。



1964年度夏山合宿

昨年の夏山合宿はタンポ平をベースに、立山東面を対象として行なわれた。幸い好天に恵まれ、規模は小さいが変化と新鮮味にあふれた場所に、自分でルートを切り拓いてゆく快さを感じながら当初の計画を終了し、大きな成果をあげることができた。

このあまり人に登られていない立山東面に我部なりのしめくくりをしたという事で昨年に引続き主に立山東面を対象とし、内蔵ノ助平にBCを置いて合宿を行なった。主な対象としては、立山東面の第1～第3尾根、黒部別山沢右俣、丸山側壁、丸山沢、剣等を決定した。

梅雨明けきらぬ悪天候のため、ハジゴ段を経由してのボツカが思いの外難渋を極め、これが先発隊との出合、BCの選択、日程等に少なからず影響を与え、当初の計画を縮小して行なわねばならなかつた。とはいえ、草原と白砂の地に縦横無尽に足跡を残し岩場への長い変化に富んだアプローチをたどつた事、しづく雨をついての長い

苦しいボツカ、貴重な2日間を割いての雪溪訓練、樹林に囲まれた原始的なテント生活等、岩に遊ぶ時間は少なかつたが、今合宿の我々に与えてくれたものは大きく、夏山の基本だけはしつかりとふまえていたように思う。

立山東面のような比較的記録の少ない場所に於て合宿を行なうさい、登山本来の姿でのつとつた山行を行うことができるが、他のグレンデ化した穂高や剣等の岩場と比べてやはりスケールの小ささは免がれ難く、一人よがりの自己満足におちいって井の中の蛙となる危険を厳に認識することが必要であるう。

〔期 間〕 64年7月13日～

24日

〔メンバー〕 牧野(L), 吉川(S), 豊坂(以上4年), 石浜 大笹(記録), 栗原, 中村, 畑中(医療), 原(気象)(以上3年), 出雲路(装備), 糸井(食糧), 大野, 加藤(装備), 黒田, 佐々木, 辻, 平岡, 細川

渡部(食糧)(以上2年), 甲田, 藤井, 宮嶋, 三好(以上1年), 梶本(0B)

〔行動概要〕

7月12日 先発隊大阪出発

7月13日 本隊大阪出発。先発天狗に縦走用荷物のボツカ。畑中, 辻は偵察の為真砂に入る。

7月14日 晴後曇。チャーターした車は称名橋の大分前でストップ。差入れの西瓜を食つてイヤイヤ出発。新人一人が遅れたが予定通り弥陀ヶ原ホテル横にキャンプ。先発2名はハシゴ段より内蔵ノ助平を経てBC予定地に入る。

第一ヒュッテ前発(9:00)称名橋(12:00)弥ヶ原ホテル(16:50)

7月15日 曇後雨 泣き出しそうなお空の下を出発。案の定雷鳥沢にかかる頃より降り出す。乗越して着く頃はかなりの雨となり、新人一人がかなりバテてきたので三田平にキャンプ。先発は偵察の為御前谷に入る。

ホテル発(7:40)雷鳥荘(13:30)別山乗越(16:40)三田平(17:30)

7月16日 雨後曇 停滞。先発も沈。

7月17日 雨 増水の為先発がフックスしたザイルが流されて渡渉不可能。対岸へ渡る方法がなく真砂沢出合下でキャンプ。先発は停滞。

三田平(10:50)真砂沢出合下(14:30)

7月18日 雨 昨日みつけたつりこしで対岸に渡る。剣沢は真茶色の水がすごい勢いで流れている。ヒマラヤのキャラバンもこんなものと考えると楽しくなってくる。ハシゴ段の沢もトイの中を流れる水の様である。内蔵ノ助平普通は涸れた沢も深い所は腰迄の水で、遂に川の中を行く事ができなくなり、ブッシュに入りBC予定地より1ピッチ程下にドン。先発は停滞。

出発(5:40)ハシゴ谷出合(7:00)ハシゴ段乗越(10:40)テント地(16:20)

7月19日 雨 牧野、大笹は先発のテントを探して、吉川、石浜は内蔵ノ助山荘に各々出発。山荘にて先発と合流し、これで全員がテントに集合した。その場をBCとして定着合宿に入ることを決定した。

7月20日 晴 御前谷迄足をのびして雪上訓練を行う。アプローチは中央山稜上部コルの少し上につきあげる沢を利用して御前谷に入った。

7月21日 晴後曇

- 第一尾根 糸井, 辻
- 第二尾根 大笹 渡部 加藤 出雲路
- 中央稜側壁 平岡, 佐々木
- 竜王東尾根 畑中, 細川, 三好
- 丸山沢 牧野, 原
- 六峰Gフェイス 栗原, 黒田
- ハッ峰上半 石浜, 大野, 藤井, 梶本
- T. K 甲田, 宮崎
- 7月22日 快晴
- 第一尾根 石浜, 大野, 黒田
- 第二尾根 平岡, 佐々木
- 第三尾根 吉川, 糸井
- 雄山尾根 栗原, 細川 岩石登り
- 中央山稜側壁 中村, 加藤, 出雲路
- 2681m尾根 牧野, 渡部, 辻, 甲田, 宮崎
- 黒部別山沢右俣 豊城, 畑中, 梶本
- T. K 三好, 藤井
- 7月23日 晴 内蔵ノ助カールにて雪上訓練
- 7月24日 曇
- 中央山稜側壁 畑中, 石浜, 黒田
- 中央山稜 糸井, 佐々木, 宮崎, 藤井
- 丸山側壁 吉川, 大笹
- 六峰Cフェイス 細川, 梶本
- ハッ峰上半 中村, 出雲路, 辻, 甲田
- 7月25日 晴 定着合宿終了, 天

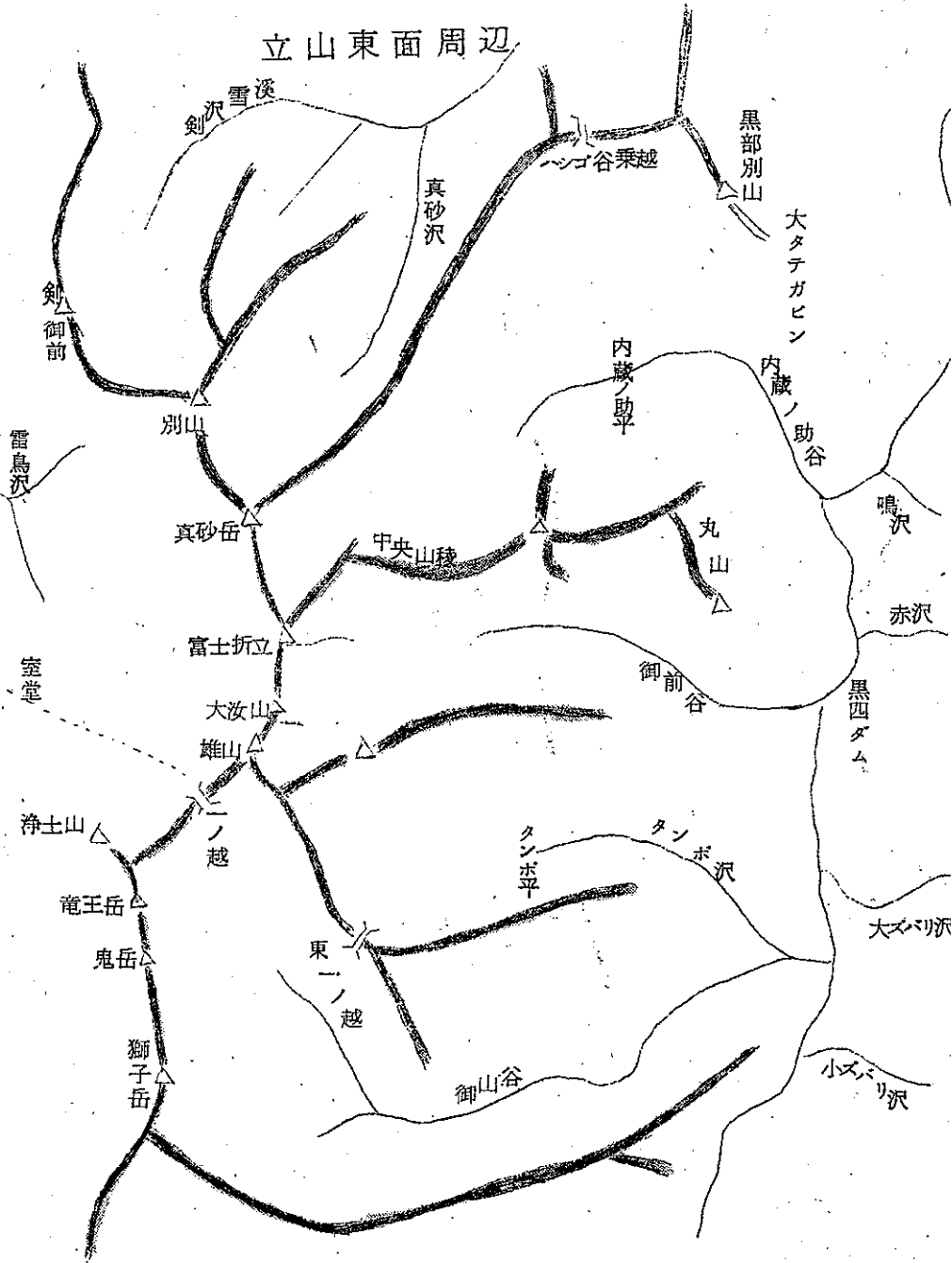
狗小屋で各縦走パーティーに分かれる。

☆丸山谷 (7月21日)
 BC(5:35)~丸山谷黒部合出(6:35)~左手岩場取付(7:00)~登はん終了(10:30)~丸山谷(11:00~11:30)~丸山南のコル(12:40)~中央山稜下のコル(13:10)~BC(14:40) 牧野(L), 原

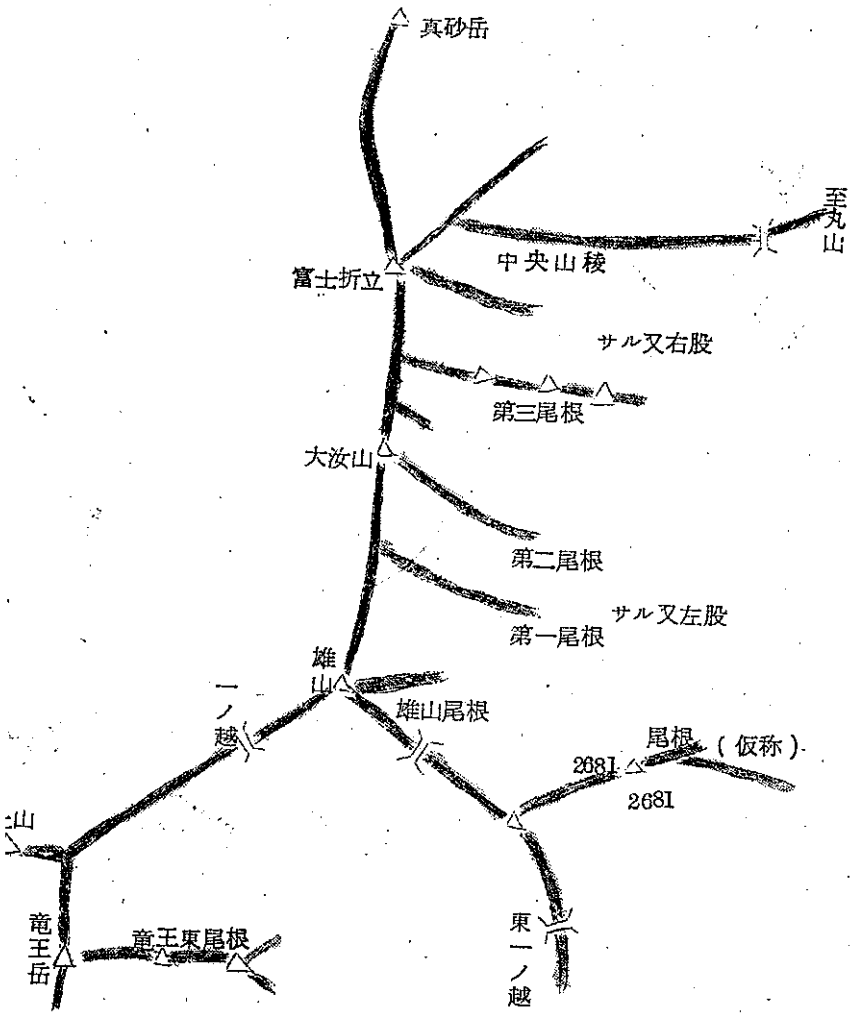
200m程沢を登り、アンザイレンにて左手の岩場を登る。見た所大したことはないが、いざ登り出すと全く危い。浮石の多いのと、上部の逆層にはまいり、ひやひやのし通し。そこからブッシュをこいで、丸山谷に出る。そこからは予想と違い案外快適な沢登り。ややつめてゆくと花崗岩のがつちりした、沢登りというより、濡れてはいるがフリクションのよくきく快適な岩登り。丸山南側ピークと中央ピークのコルのやや中央よりに出る。後はブッシュこぎで中央山稜下のコルに出、内蔵ノ助平への沢を下る。大体去年のルートをとつた。

☆丸山内蔵ノ助谷側側壁(7月24日)
 合宿の最終日、吉川、大笹パーティーが試登。中央のルンゼを1ピッチ登つて上部を偵察後、側壁左の沢に入りコンテをまじえて4ピッチ、200m

立山東面周辺



立山東面



m程登り、時間切れで退却。

☆黒部別山沢右股(7月22～23日)

豊坂、畑中、梶本パーティーが廻り、ほほ沢通しにトレース。黒部別山にてとび出してから、ヤブと夕暮れに難行し、内蔵ノ助BCのすぐ上でヒバーク。翌朝BCに帰つた。

1964年度

〔夏山縦走記録〕

☆赤元、白元＝剣北方パーティー

〔期間〕 7. 26～7. 30

〔メンバー〕 大笹(L), 辻

〔記録〕 7月26日雷鳥沢～池ノ平BC。27日、剣岳往復。28日白元沢廻行。29日、池ノ平往復。30日、ケヤキ平～下山。

☆立山～三俣～冷池＝冷池パーティー

〔期間〕 7月26日～8月2日

〔メンバー〕 原(L), 糸井, 甲田藤井,

〔記録〕 7月26日、室堂～五色ヶ原。27日、五色ヶ原～スゴ、28日、スゴ～薬師岳～太郎小屋～薬師沢出合。29日、出合～高天ヶ原～奥ノタル沢上部。30日、～赤岳～烏帽子岳～南沢岳～南沢途中。31日、～針ノ木谷～針ノ木峠。8月1日、針ノ

峠～種池。2日、種池～冷池～鹿島標往復～赤岩尾根～大町。後半は快調なペース。このコースは特に新人達にとって、広く山を知る上に有益であつたと思う。高天ヶ原は全然人臭くなく、静かで別天地の様であつた。

☆立山～赤牛～穂高＝口元ノタル沢パーティー

〔期間〕 7月26日～8月3日

〔メンバー〕 栗原(L), 大野, 渡部, 保母OB。

〔記録〕 7月26日、室堂6:50～五色12:00～平の渡し17:00～TS16:20。27日、出発8:00～東沢出合10:30。28日、出発7:35～下の黒ビンガ8:45～口元のタル沢出合11:15～タル沢ヒバーク地16:30。29日、出発7:20～北西尾根12:30～TS16:00。30日、出発7:00～温泉沢19:30。31日出発8:30～高天ヶ原山荘9:00～赤牛岳13:30～山荘15:20～水晶池畔16:20。8月1日出発6:20～岩苔小谷乗越7:30～三俣小屋8:55～双六小屋10:25～槍ヶ岳15:40～TS16:30。2日、出発6:50～北穂高岳11:40～奥穂小屋14:40。テント設営代1人

50円也。3日出発5:30~奥穂6
:00~天狗のゴル8:20~西穂1
0:30~西穂山荘12:20~上高
地14:00。

☆立山-柳又谷-宇奈月=柳又パーテ
ィ-

〔期 間〕 7月26日~8月1日
〔メンバー〕 畑中(L), 出雲路,
加藤, 平岡。

〔記 録〕 7月26日, 雷鳥~仙
人谷途中。27日, ~けやき平~関電
軌道くろなき下車~TS。28日, ~
柳又, 北又出合~下ノ廊下偵察。29
日, 下ノ廊下偵察~横山越え~楊河原。
30日, 上流偵察, 敗退。31日, 下
流飛竜峡往復。8月1日, 楊河原~横
山越え~軌道~宇奈月。バテの為士気
あがらず。我々が行つたところは、まだ
かなり水量があり、渡渉が困難であつ
た。特に飛竜峡付近では、完全廻行を
目ざしても、徹底的に高捲く他はない
だろう。

☆立山~高天ヶ原~上高地=槍パーテ
ィ-

〔期 間〕 7月26日~8月1日
〔メンバー〕 石浜(L), 黒田, 佐
々木, 三好。

〔記録録〕 室堂~五色。五色~つ
くと動くのがイヤになり、そのまま「
どん」。27日, 五色~スゴ。スゴで
エッセンをひろつて食いバテ。28日,
スゴ~薬師沢出合。佐々木の助平笑が
とまらない。29日, 出合~高天ヶ原。
高天ヶ原の良さに感激。30日, 高天
ヶ原~赤牛沢~立石~高天ヶ原。上ノ
廊下に感激。31日, 高天ヶ原~双六。
台風さんが近づく。我々のテントに氣
がひけた。8月1日, 双六~槍~上高
地。横尾2時に着きドン。翌日帰阪。

1964年度冬山合宿

今年度の冬山合宿は立山東面を対象とすることを決定し夏山合宿以来検討、偵察を続めていた。ところが合宿直前になつて突然、関電トンネルの通過が許可されないことになり急に計画を變更せざるを得なくなつた。

このために今年度の冬山合宿は全く偵察もなしに、短期間で新しい計画を立てなければならなかつた。それで、記録的な成果よりもトレーニングに重点を移したような計画となつた。たしかに大熊山—早乙女岳—大日岳—奥大日岳という計画を立てたとき、猛烈なラッセルと強風にさらされ、日本の冬山らしさを味うには格好のものであらうと予想していた。

しかし全く予想に反して驚く程の好天に恵まれ、冬山らしさの全くない冬山合宿となつてしまつた。そして大部分の部員は欲求不満を感じつつ下山した。

〔期 間〕 自12月24日～
至12月31日

〔メンバー〕 (C, L) 牧野, (S, L) 吉川, (医療) 豊坂, (記録) 大笹, (会計) 石浜, 栗原, 米井, 辻, (装備) 平岡諦, (食糧) 渡部, 出雲路, 大野, 細川, 黒田

〔行動概要〕

12月22日 晴

先発三名伊折より小又川に入る。伊折より馬場島方面に向りりつばなトレースがついていた。冬とは思えない程の陽気の中を大小とりまぜ3名トコトコドスンドスンと歩を進め小又川に着く(11:20) それより小又川に入り、堤防より一ピッチ上流にテント設営(14:20)

12月23日 高曇り

先発の目的であるコット沢偵察に出発。ただ広い河原で相当雪が降つても大丈夫だろうと考えながら問題の最後のコル下部周辺に着いた。コルのつめはもう少し雪が降れば落ちそうだが、その場合は早乙女岳から出ている尾根にすればよさそうだ。

出発(6:40)-(10:45)
コット沢コル(13:20) T, S

12月24日 小雨

早朝から小雨のしよほ降る中を本隊の出迎えに行く。小又川の出合に着くと強烈なラッセルが通つたらしい。これにはさすがの辻も声をし。伊折への途中本隊の乗つたトラックに出合いそれよりボンカを始め全員仮のBCに入る。

出発(5:35)-(7:40)本隊と会う(14:00) T, S

12月25日 晴後曇

B, C(4名) CI(5名)隊が先行しCII隊はテント撤収し後を追う。コルまで2時間程の所でB, C, CI隊は荷物をデボシテント撤収に帰る。CII隊はそのままB, C予定地に入りトリブルボンカをし天気が崩れないのを幸いでB, C, CI隊も一気にB, C予定地に入る。

出発(6:00)-コル(12:40)-T, S(13:00)-B, C
設営(18:21)

12月26日 晴れたり曇つたり

計画より早くCI, CIIの両方を上げるべく元気に出発今日も又剣岳がよく見える。大した問題もなくCI設営。

出発(6:55)-早乙女CI(10:55)

12月27日 高曇り

CII設営の為だつ広い尾根をトコトコ歩いて大日小屋横にCII設営

出発(6:55)-早乙女CI(10:55)

12月28日 曇後晴

CIは朝のうちガスに巻かれていたので停滞10:00頃石浜、平岡がやつて来た。相変らずええ天気ですなあ。

12月29日 晴れたり曇つたり

朝のうちあまりよい天気ではなかつたが上の方は晴れているらしい。早速アタックに出発した。技術的に問題はない。5時間程でアタックに成功。この日BCの連中もCIIを往復したのでCIIを撤収し早乙女に集結した。夜計画が早く終りすぎたのでどうするかもめたが結局安全を考えて31日に撤収することに決定した。

出発(8:00)-(12:30)
奥大日-CII(13:15)-(14:20) CII撤収-(15:45)早乙女CI

(書人不知)

	伊折	小又川 テント地	コト沢 B. C.	早乙女 C. I.	大日岳 C. II.	奥大日
先	栗原, 糸井, 辻					
発						
1		→ 牧野以下10名 → 3名				
2		テボ → 9 (牧野)	→ 5 (豊坂)			
3			→ 5 (豊坂) → 5 (石浜) → 4 (牧野)			
4		大熊山及び 下山ルート → 4 (牧野)		→ 5 (吉川) ←	5 (豊坂)	
5			→ 4 (牧野) → 2 (吉川) ←	→ 2 (石浜) ←	(停)	
6			→ 3 (吉川) 前 大 日 →	→ 5 (豊坂) ← 5 (牧野殊)	← 3 (豊坂)	
7			→ →	← ←		
8	←	牧野以下13名				

大日岳 パーティー 食料総覧

主食	モ チ	1人 150g	×165食	=41250g	ランチクラツカ ー ト ー ズ ン ク ラ ツ カ ー	1人 150g	45食	6750g
	小麦粉	140	225	31500				
	ドライミルク	20	225	5500	カン シ ン ト ー ズ ン ク ラ ツ カ ー	150	45	6750
	タマラン	140	240	33600				
調味料	みそ	35	80	2800	レーズン ク ラ	150	45	6750
	カレー	27	75	2025	バター ラ ン ド	150	45	6750
	チヤーン の 素	10	235	2350	メリー ク ラ ツ カ	150	45	6750
	中華 ス ー プ の 素	14	80	1120	ラ ス ク	150	45	6750
	コンソメ	5.3	85	450	バター ク ラ ツ カ	150	45	6750
	クノール ス ー プ	25	75	1875				
スープ袋	鯨肉	30	315	9450	チ ー ズ	28	105	2940
	マトン	30	315	9450	ビー ナ ツ	30	45	1350
	野菜	40	630	25200	チ ョ コ レ ー ト	20	30	600
	天かす	5	630	3150	レー ズ ン	30	15	450
	ラー	25	315	7875	甘 納 豆	30	15	450
					あ め	30	30	900
その他	砂糖	40	315	12600	ウ イ ン ナー ソ ー セ ー ジ	28	75	1950
	緑茶	7	315	2200				
	紅茶	4	378	1512				
	ココア	10	126	1260				
	コーヒー	6	126	756				
	塩			750				
	コンヨー			30				
	ハイミー			75				
	ニンニク							
	ミルク							
						総重量約		258kg
						一人日約		800g

梅池新人合宿食料総覧

1人 モ チ 250g×35食=8750g			一人				
小麦粉	140	50	7000	クラッカー レーズンクラ	150	10食	1500g
ドライミルク	20			カンミン レーズンクラ	150	10	1500
タマラン	140	55	7700	レーズン クラッカー	150	10	1500
みそ	35	20	700	バターランド	150	10	1500
カレー	27	15	405	バター クラッカー	150	10	1500
チャーハン	10	50	500	メリー クラッカー	150	10	1500
中華スープ	14	25	350	ラスク	150	10	1500
コンソメ	5.3	15	80	ウインナー ソーセージ	26	15	390
クノールスープ	25	15	375	チーズ	28	25	700
鯨肉	30	70	2100	ピーナツ	30	10	300
マトン	30	70	2100	チョコレート	20	10	200
野菜	40	140	5600	レーズン	30	5	150
天かす	5	140	700	あめ	30	5	150
ロード	25	70	1750	総量	56kg		
砂糖	40	70	2800	一人一日	798g		
緑茶	7	70	490				
紅茶	4	84	336				
ココア	10	28	280				
コーヒー	6	28	168				
塩			250				
コシヨウ			10				
ハイミー			15				
にんにく							
ドライミルク							

装 備 表

品 名	単重量	ゴット泥フル B. C	早乙女 C1	大 日 C2	樽池	総数	総重量
テント T1	8.0 (kg)			1		1	8.0 (kg)
T2	8.3		1			1	8.3
V2	12.0	1				1	12.0
V3	12.0				1	1	12.0
スコップ	1.6	1	1	1	1	4	6.4
ノコギリ	0.1	1	1	1	1	4	0.4
タワシ	0.05	1	1	1	1	4	0.2
ブラシ	0.03	1	1	1	1	4	0.12
針 金	0.02	4m	4m	4m	4m	16m	0.32
ローソク	0.06	21	21	21	10	73	4.38
張線予備		6m	6m	6m	6m	24m	0.2
ポリ袋		2	2	2	2	8	
ポリシート		1	1	1	1	4	
ベ グ	0.1	22	27	27	22	98	9.8
ラジュース	1.2	1	1	1	1	4	4.8
コツヘル	0.8	1	1	1	1	4	3.2
杓 子	0.05	1	1	1	1	4	0.2
メ タ	0.03	7	7	7	5	26	0.78
ケ ロ		14.7ℓ	14.7ℓ	14.7ℓ	11ℓ	55.1ℓ	55.1
ポリタン	0.1	2	2	2	2	8	0.8
サイフォン		1	1	1	1	4	
茶 コ シ		1	1	1	1	4	
雑 布		1	1	1	1	4	
雪 温 計	0.04	1	1	1	1	4	0.16
ナイロン ザイル白	40m 2.5	1	1			2	5.0
赤	40m 2.5			2	1	3	7.5

品名	単重量	コバ沢 B.C	早乙女 C1	大目 C2	樽池	総数	総重量
fix用ザイル	(kg)					50m	2.5kg
ハンマー	0.5	1	1	1	1	4	2.0
岩用ハケ	0.06	2	2	4	3	11	0.66
氷用ハケ	0.2			2		2	0.4
カラヒナ	0.12	4	4	4	5	17	2.04
捨 縄						50m	2.5
ツェルト	1.2	1	1	1		3	3.6
赤 旗					10枚	200枚	
竹 竿	0.1			95本	5本	100本	10.0
ラ ジ オ	0.8	1	1	1	1	4	3.2
予備電池	0.05	1set	1set	1set	1set	4set	0.2
天気図用紙		2冊	2冊	2冊	1.5冊	7.5冊	
工 具	0.7	1set				1set	1.4
トランシーバ	1.0						1.0
ストック	1.0						6.0
							総重量 177.10kg

1964年度春山合宿

剣岳北方稜線といえ、今では記録も多く相当ポピュラーになつていて、新しみには欠けるが、我々の従来のどちらかというと広く歩き廻る傾向の強かつた登山から見ると、雪と岩の稜線をじっくり構えて登るという事は相当の変化であり、新しい試みである。記録が多いといつても、技術的、気象的、或はスケールの点でも日本第一級の稜線であるので全員心してかかるうと、北方稜線に合宿した。幸い下での予想に拘らず、他パーティーの後につくこともなく、自分達でルートをつけ得、例の悪天と合わせ張りのある山行であつたと思われる。一応赤谷山をベースとする剣岳往復、新人を中心にした毛勝往復、及び猫又東尾根を使つての小黒部谷往復という我々の所期の目的は達成した。しかし又我々に多くの反省と今後の良き指針を与えてくれる問題点の多い山行であつた。ポーラーシステムによる登山の良否、本峰と毛勝に隊を二分しそれを固定化した事、現地での食糧梱包のこと、下での連絡不徹

底のこと等々それに計画も無事に終り、全員赤谷山に集結しての帰り、赤谷尾根下部で新人一名がスリップして滑落それを追つた上級生一名もケガをした事である。これなど結果としては大した事がなくてすんだものの、唯助かつただけではすまされぬ色々の問題を合宿している。要するにリーダーシップの欠如に基づくものであり、我々は下山後のリーダー会で相当突つ込んで反省し今後二度とこういうことのないようにしなければと肝に銘じた次第である。今後この又とない、あつてはならぬ教訓を生かして飛躍のない充実した山行を積重ねていかねばならない。'65年春山をふりかえつてみてざつとのべたが、合宿の記録を次に記していく。

(記 原 治左エ門)

〔期 間〕 '65年3月9日

4月2日

〔メンバー〕 原(O. I.), 石浜(S. I.), 加藤, 平岡(装備), 渡部, 出雲路(食糧), 大野(気象), 糸井

(記録)、黒田(医療)、以上各職務。

池平山CⅢ, 栗原(J2), 大笹(T3), 渡部(S2)
大窓CⅡ, 原(S3), 豊坂(M5),
平岡(M2), 糸井(E2), 出雲路(T2),
赤谷山CⅠ, 畑中(M2), 佐々木(S2), 細川(T2), 加藤(T2)
ブナクラ乗越, 石浜(T3), 辻(T2), 大野(T2), 黒田(M2),
藤井(S1), 三好(T1), 甲田(S2)

〔行動概要〕

3月9日

風邪により遅れて入る石浜, 畑中,
大笹, 平岡の4人を除く15人で大阪発

3月10日 雪後曇

富士一上市一蓬沢(9:00)一伊折(10:40~11:00)一ゾロメキ(15:20)一馬場島(17:00)。

バスは蓬沢どまり。トレースをたどつて5時に馬場島荘着。

3月11日 快晴

◎出発(8:15)一ゾロメキ(8:35~11:00)一デボ地(12:00~12:25)一ゾロメキ(12:50~13:55)一赤谷尾根取

付点

◎出発(6:40)一赤谷尾根取付点(8:40)一T.S. 予定地(11:00~11:50)一取付点(12:40)一馬場島(13:20~14:10)一取付点(15:40~16:00)一デボ地(16:50~17:00)一取付点(17:50)

豊坂, 栗原, 佐々木の3名は赤谷尾根偵察早大のトレースを使い軽く1600m迄往復、その後馬場島荘の個装をたたくて赤谷尾根取付点へ、再び馬場島へ戻り他がデボしたEssenをボツカ、残り原等12名はゾロメキに荷上してEssenをつめ換して、ダブルで馬場島荘の個装をたたくて取り付き点へ、カンは大部分、馬場島荘より1ピッチのところにてデボした。

3月12日 曇

出発(6:05)一デボ地(6:30~7:00)一取付点(7:35~8:00)一1600m(12:35)~13:20)一取付点テント(14:20)

15人全員で、昨日のデボを回収の後赤谷尾根を登り1600mにてデボ。

3月13日 風雪

出発(8:00)一1600mテント地(13:20)

赤谷尾根取付のテントを徹収、昨日来

の雪でトレースは完全に消えてラッセルがきつかった。昨日のデボは完全に雪の下となっていた。

3月14日 曇一時晴

◎出発(7:35) - 赤谷山(11:45) - 1600mテント地(13:20)

13名で赤谷山CI予定地へボツカ。深雪のため、空身でトレースをつけてからボツカする。赤谷山の最後の急斜面のLピッチはなかなかきつた。この頃から晴れ、勇姿な本峰にびつくりしななあーモオー。

◎出発(7:15) - 赤谷尾根取付(8:40) - 馬場島(9:45) - テント地(13:40) 栗原、加藤の2名は石浜らの後発4人を迎えて馬場島往復、4人は伊折にいた。4人は馬場島泊り。

3月15日 快晴 CI建設

出発(7:30) - 赤谷山(10:25 ~ 11:05) - テント地(12:30)

雪はよくしまつてアイゼンをきかせて赤谷山へボツカ。原、佐々木、糸井、出雲路、三好の5人は赤谷山にCIを建設入る。残りは、再びT、Sへ下る。石浜等4名が到着していた。1600mと赤谷山でトランシーパーで交信する。

3月16日 曇 大窓ルート工作、赤谷へ全員入る。

◎出発(7:30) - 大窓(11:50 ~ 12:30) - 赤谷山(15:25)

赤谷山CIでは、三好をT、Kに残し、原、佐々木、出雲路、糸井の4名は大窓迄ルート工作に出る。4人が白萩山を登っている時、早くも下の連中は赤谷山着、赤元迄は広い稜線、白元、赤元間はやせており、小黒部側に雪が発達している。途中1ヶ月f i x。冬のf i xが残っている所があり、それを使用する。大窓への下りは急な雪壁となっており、最後の下りは大窓から見て左手の沢がしまつておりこことをルートに採るのが良さそうに思われた。

◎出発(6:05) - 赤谷山(8:20)

1600mT、Sより14名はテント撤収して全員赤谷山へ上る。CIに全員、全物資が上る。

3月17日 ガス 停滞

3月18日 快晴 CII建設

◎出発(7:15) - 大窓(13:50) - 赤谷山(15:50)

CIの4名とCIIの3名がサポートしてCIIの5名と共に大窓へ向かう。偵察不十分により途中f i x1ヶ所工作に時間がかかる。大窓の下りは人間と

荷物を別々にしてザイルで下す。C II
を建設5名が入り、7名は赤谷山B。
Cへ戻る。

◎出発(7:30)ーブナクラ乗越
(9:30~11:50)ー赤谷山
(13:00)ーブナクラ乗越(14:
50)
剣パーティーの出発を見送つて出発、荷
が重いのでダブル・ボツカ。上は青空、
コルはガス、隊と毛勝隊と別れる。

3月19日

◎出発(7:30)ー池の平山(1
2:00)ー大窓(18:00)
T、K出雲路、原、豊坂、平岡、糸井
の4名池ノ平山迄のルート工作に出か
ける。大窓からの登りは猛烈にクラス
トした急斜面であつた。第1のピーク
から例の岩峰は小黒部側の雪のつき具
合もよく、トラヴアースすることにし
てfix。大窓の頭迄はきついクラス
トであるが稜線通し。後はコルから池
の平山への最後の登りが問題となつた
が、左手の雪面をトラヴアース気味に
上り、決を直登するルーに決定してf
ixした。引き返す頃より風雪になり、
苦勞してテント地へ戻る。

赤谷山◎出発(7:30)ー大窓(1
0:10~10:30)ー赤谷山(1
2:00)

C IIIの3名大窓へ上る。C Iの3名サ

ポート

◎出発(6:40)ー引き返し点ー
ブナクラ乗越(8:20)

毛勝、往復に出かける。例のルンゼは
記録通り3本ルンゼの一番左が良さそ
う。風が強く、雪も多くブツシュは出
てなかつた。途中で天候悪下。ルンゼ
での下りに時間をくう。

3月20日 風雪

大窓、毛勝、赤谷いずれも停滞

3月21日 ガス

どこも停滞。トンカツが食いたいなあ
ー。

3月22日 曇後風雪

大窓 停滞

赤谷山 畑中、佐々木C IIへ、12時
半C Iへ引き返したが、白兀
の途中で凍傷にやられ、C II
へ引き返す。C IIへ8名泊る。
加藤、細川はブナクラ乗越へ
出発(8:00)ーブナクラ
テント(9:00)ー猫又の
途中で引き返す(10:00
)ー3本ルンゼ(11:00
)ーブナクラテント(1:
00)ー赤谷山(12:00)

毛勝:毛勝往復へ出かけるが天候がく
ずれて、引き返す。途中で、加
藤、細川に逢う。

3月23日 快晴

大窓 出発(7:55) - 第一のピーク(9:15) - 大窓の頭(10:25) - 池ノ平山(11:30~2:30) - 大窓(3:55)、TK糸井、ルートも確保され快晴であるので問題なく池ノ平山へつく。栗原、大笹は小窓への下り口を偵察、他の5名は池の平山より北におりたところへ雪洞を掘る。
CIII建設、山形大遭難、雪洞へ山形大の人も泊る。CIIの4名は雪洞を掘って大窓へ戻る。

赤谷山 畑中、佐々木CIへ戻る。白兀の途中でCIより来た加藤、細川と出会い4人でCIに帰る。

毛勝 毛勝アタック(別記)

3月24日 風雪 停滞

3月25日 ガス

CIII 出発(6:50) - 小窓雪溪(9:20~10:10) - 引返点(12:00) - AC(14:50)

栗原、大笹偵察に出る。池ノ平からの下りはまともにリッチを降りる。最後の下り迄は問題なく、最後の下りでアニザイレンして4ピッチで小窓着、ガスが濃くなってきたので引き返す。

CII, CI, 毛勝は停滞

3月26日 風雪 停滞

3月27日 風雪 停滞

3月28日 晴後風雪

CIII 栗原、大笹アタック成功(別記)

CII 豊坂、糸井CIII往復、出発(7:10) - CIII(10:00~

1 12:30) - CII(2:20)

原、出雲路CI往復、出発(8

:00) - CI(2:00~2

:40) - CII(6:30)

山形大が徹収するのでボツカを手伝う、帰りはガスと風雪にみまわれる。

CI 停滞

毛勝 猫又東尾根へ出発

3月29日 雪後快晴

CIII, CII, 停滞

CI 出発(12:00) - プナクラ乗越(13:00~13:50) - CI(15:15)

毛勝 21時、東尾根をトレースして帰ってくる。

3月30日 ガス

CIII, CII, CI 停滞

毛勝 天気待ちの後、午後一時出発 - 4時赤谷山へ戻る。

3月31日 晴

CIII, CII 徹収

CI 畑中、加藤、昨日赤谷へもどつ

た毛勝隊の石浜、黒田の計4名
CⅡへ、CⅢの3名と原、平岡
大窓へ。後全員赤谷山へ戻る。
テント3張、雪洞の一つ掘り、
Esserの食い放題宣言。

4月1日 晴後曇

赤谷山直下の急斜面はザイルを $f : x$
して慎重に下る。赤谷尾根にてスリッ
プ事故で時間をくう。ゾロメキ発電所
に帰る。

4月2日 雪

合宿午に入つた日も思えば雪であつた。
今日下山の日も雪か。道端の小川のせ
せらぎにも、空からは雪が舞い降りて
るが、春の息吹がした。今日は富山で
何を食うか、中さん待つててくれよ。

アタック隊行動記録

剣本峰 3月28日 栗原、大笹

今日こそはアタックに出られるだろ
うと、雪洞より顔を出す、目前にチ
ンネがとびこんできた。思わず歓声を
あげる。ヘッドランプに導かれ、小窓
に降りる。ここで日が昇る。小窓尾根
へのリツチは雪が深くラツセルに悩ま
される。その後アイゼンの領域となり、
三ノ窓を過ぎ、池ノ谷乗越につき、交
信する。天気も持ちそうだし、11月

の時より歩きやすいと話しながら、早
くも長次郎のコルに立つ。ザイルを出
して登りピーク着11時32分。一時
間休息して帰途につく。小窓王あたり
で天気かぐずれガスと強風の中を雪洞
につく。

時間記録

起床(1:00) - 出発(3:20)
- 小窓雪溪(5:30~6:20) -
小窓尾根(8:00) - 小窓王(9:
20) - 池ノ谷乗越(10:00~1
0:30) - 長次郎のコル(11:0
0) - 本峰(11:32~12:35
) - 長次郎のコル(13:15) - 池
ノ谷乗越(13:40) - 小窓王(1
4:20) - 雪洞(CⅢ)(17:4
0)

毛勝山 3月23日 石浜以下7名

やつと移動高がきてくれた。200
0mを越える辺りから頂上まで、ひざ
以上のラツセルが続き、3時間後猫又
に着く。後は100m前後の登降りを
くり返す。風も弱くいい天気。小黒部
側の雪底に気を配りながら、毛勝山ア
タック完了、猫又に東尾根トレースの
ための赤旗をたてて、ブナクラ乗越へ
帰つてくる。

時間記録

出発(6:40) - 猫又頂上(9:0

5)一毛勝南峰(11:15)一本峰
(11:30)一猫又頂上(14:00)
0)一テント(16:00)

猫又東尾根 3月28日、29日、石
浜、大野、黒田、辻

28日 2名がキスリンク、2名がサ
ブで出発、猫又頂上から東にのびる尾
根を下り始めるがガスにつつまれ、雪
洞を掘つてドン。

時間記録 出発(7:00)一猫又
ピーク(10:30~11:30)一
東尾根1600mのあたり(13:5
0)29日

29日 天気が悪いが、折尾谷に入る
沢へ下る。それから折尾谷へ入り小黒
谷合流点に出る。1600m~170
0mの登りと、ブナクラT、Sへもど
ることを考慮してすぐ引き返す。猫又
ピーク付近で完全にガスられ、風も出
てくる。時間をくろ。突然ガスが晴れ
て、銀色の剣が目にとびこんでくる。

やがて日も暮れて、夜9時にT、Sに帰
帰る。

時間記録 出発(6:40)一折尾
谷出合(7:35)一小黒部出合(8
:05)一雪洞(11:20)一猫又
ピーク(17:30)一tent(2
1:00)

吹雪く北方稜線

一アタックの記録一

3月28日 晴後雪

午前3時15分、ひっそりと雪洞を
出る。三日間の風雪の後のかきわけて
いく新雪は、かぎりなく白い。東の空
に鎌の様な月が無気味に赤く、不安な
予感がする。

池ノ平山へ出ると、硬くクラストし
た雪面の上を、head-lumpの
光の輪の中に、確めつつたどつていく。
富山平野はぼんやりと晴れている事が
判るが、日本海には厚い雲のとばりか
あるようだ。寒さと、緊張のため、水
化した急な雪面上で、膝がガタガタす
る。偵察でつけた捨縄を使い、懸垂下
降で下り小窓に5時40分に立つた。
薄いガスの中で夜明けを迎えた。ベ
ルを通して見る朝の陽はにぶく、どこ
かおかしい。最良のアタック日和とは
いれないかもしれない……。小窓
尾根側にとつつき。岩の下で渡部と交
信。気象解説や漁業気象を聞き、天気
図を作成する。冬型はすっかり弱まっ
ているが、期待した移動高はあまりバ
ットしない。とにかく良くなるだろう
と思つた。6時0分~6時30分迄第
一回交信と、エッセンをとる。偵察の

時不安定な雪だつた右手の浅いルンゼは、自萩からの吹き上げでよくしまり、コンティニューアスで登る。登りきつた丸の尾根上のところからは深いラツセルになる。急傾斜の軽い粉雪の中を、身体ごと雪をかきわけつつ、少しづつ高度をうばつていく。ガスが晴れて、素晴らしい青空が高く、雪の上にある。振り帰ると、向いの池ノ平側の斜面には、リツジ通しにきれいにトレースが下りている。飛び出してきた雪洞が遠く点のように見える急斜面の新雪だつたが、下層でよくなじんでいて、不安は感じない。Mピークより尾根上へ出る少し手前でトラバースして頭の下鞍部に出る。尾根が氷雪をまとひ、その側壁はただ「すごい」の一言につきま。リツジ通しに小窓尾根をゆく。三ノ窓にはテントが一張あり、小窓王下の下りは *fix, soil* がある。三ノ窓への不安定な雪面のトラグアースは、そのザイルに、ウエストロープをかけて通過したが、何ともいやなところだつた。*fix* がなければ、岩にハーケンを打つて、確保しなければならぬであろう。

9時10分三ノ窓に出る。ジャンダルムの下り風をさけて休む。池のガリーへは夏の通り、ジャン下の小さなルンゼから入り込む。最初の600m程の

トラグアース又は足場が、流れていきそうでひどく不安定な所だつた。しかし、その上からはよくしまつた絶好の雪質で、その上風の通路にそつて雪面に紋様がつけられ、それが一層登りやすくしている。30分足らずで登りきり、右手の浅いルンゼから稜線上に飛び出す。雪庇がどの程度かわからないので不安定なトラグアースを強いられる。10時雪洞と交信、豊坂氏の声がかたく聞えてくる。例によつて渡部の気象通報、日本海の北部に気圧の谷が出来そうで気になる。12時の交信を約して別れる。交信中ぬいていつた小窓尾根からのアタツクのパーティーのトレースが続いている。ハツ峰が信じられないくらいに、優雅に白く輝いていた。快適なペースで進み、11時35分本峰へ着く頂上下の台地で休む。12時の交信を待たずに11時55分にスイッチを入れる。第3回目の交信をし、エツセンをすまして、12時35分下山にかかる。すでに視界が悪くなつてきている。長次郎の科尔への下りは、スタツカットで、西からの吹き上げにバツチリしごかれる。一時間で池ノ谷乗越、さつとガリーを下り、2時三ノ窓、この頃になるとガスが濃くなり天気が悪化してくる。小窓尾根に出たところから地吹雪となり、ピーク

の手前のコルについた時、あの深いラッセルの跡はきれいに消えていた。ふみ出すとかすかにそれとわかるが、しんどいこと。地吹雪というより、吹雪いているようだ。登りに使ったかすかに尾根状の部分を一直接に降り。小窓へ下り立ち、岩かげに風をさけて、ザイルをつけ、8時45分、栗原の確保で、最初の雪壁のトラヴァースが始まる。4ピッチで風の中を登りきると、さらにひどい寒気が西面からたたきつけてくる。ものすごく湿ったガス状のものが顔半分を凍らせる。しばらくはコンティニアスで、懸垂地点は1ピッチのスタカット、その上でザイルをまく。リッジの一コープの起伏を数えるようにして越していく。足もとぐらゐまでしか見えない。「もうそろそろ・・・」と思つた時、目の前に白い高みがあつた。それが池ノ平のピークだつた。急斜面をかけるようにして上り、その上に立つた。前がすつぱりと落ちている。栗原が顔をくしゃくしゃにしながら、歓声をあげて近づいてくる。さし出されたその手を思わずにぎりしめる。始めて歓びがわいてくる。ピークから一歩東へ下りるとうそのように静かになつた。もううす暗くなつている中を、我々は雪をゆつくりかきわけつていつた。視界の中に旗ざおが一本立

つていた。その横を通り、朝出た雪洞へついた。渡部が我々二人を待つていた。

(記・大 笹)

春山合宿毛勝隊雑感

3月1人2年3人新人3人の7人家族の毛勝隊は3月18日 本峯隊と分家してブナクラ乗越にて新所帯を構えることになつた。その日の天気は我々の独立を祝うかのようによい天気だつた。時間をかけてがつちりとした家をかまえた。親1人、大学生3人小学生3人の家族はなかなかにぎやかである。この家族の仕事は毛勝往復と巖又東尾根をトレースして小黑部谷を往復することである。

天気が悪い日が多くなかなか仕事はかどかどらないが3月23日やつと新家落成ハネムーンに出かけることが出来た。たつぷりとハネムーンをたのしむことが出来る程よい天気で家族全員相当黒くなつた。

これで子供ずれの遠足も終りあとは一泊かけての大人の慰安旅行がある。

3月28日いつもの通り家のまわりの畑に肥料をまいて出発した。やはり大人ばかりだと行動もしやすい。

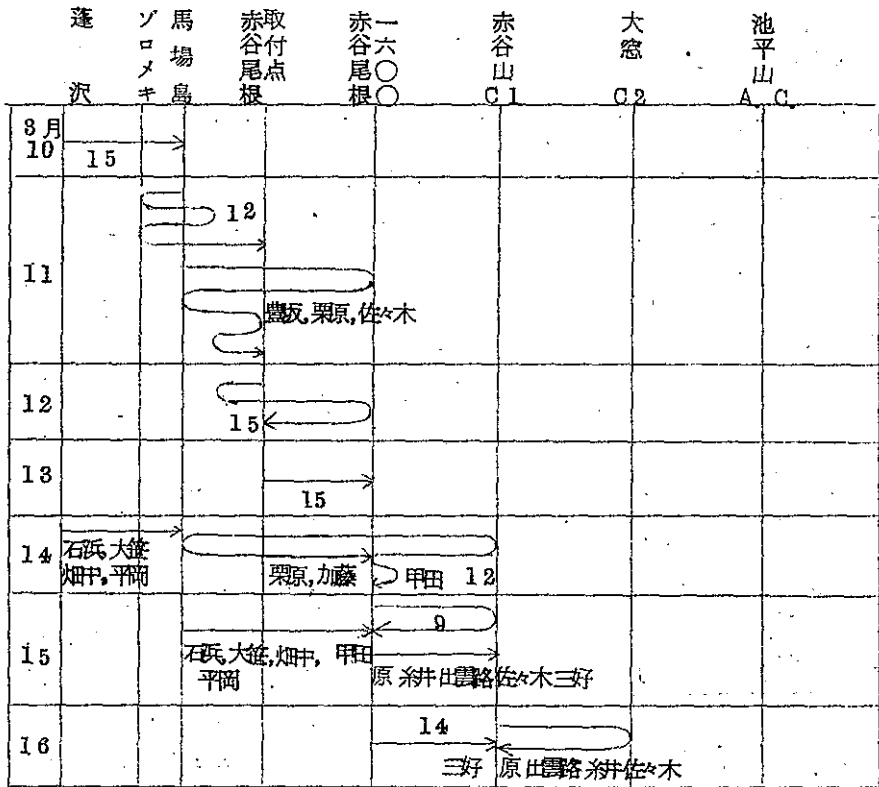
東尾根の中間位のつれ込み旅館にとまり、徹夜でナンヤカンヤとやつた。慰安旅行2日目の天気はあまりバツトしなかつたがせつかく来たのだからと思ひ小黒部谷の出会いまで行きその足で帰宅の途についた。

猫又のピークあたりでガスられこまつたがまもなく天気になり9時頃帰宅した。

子供がバシヤグことバシヤグこと。

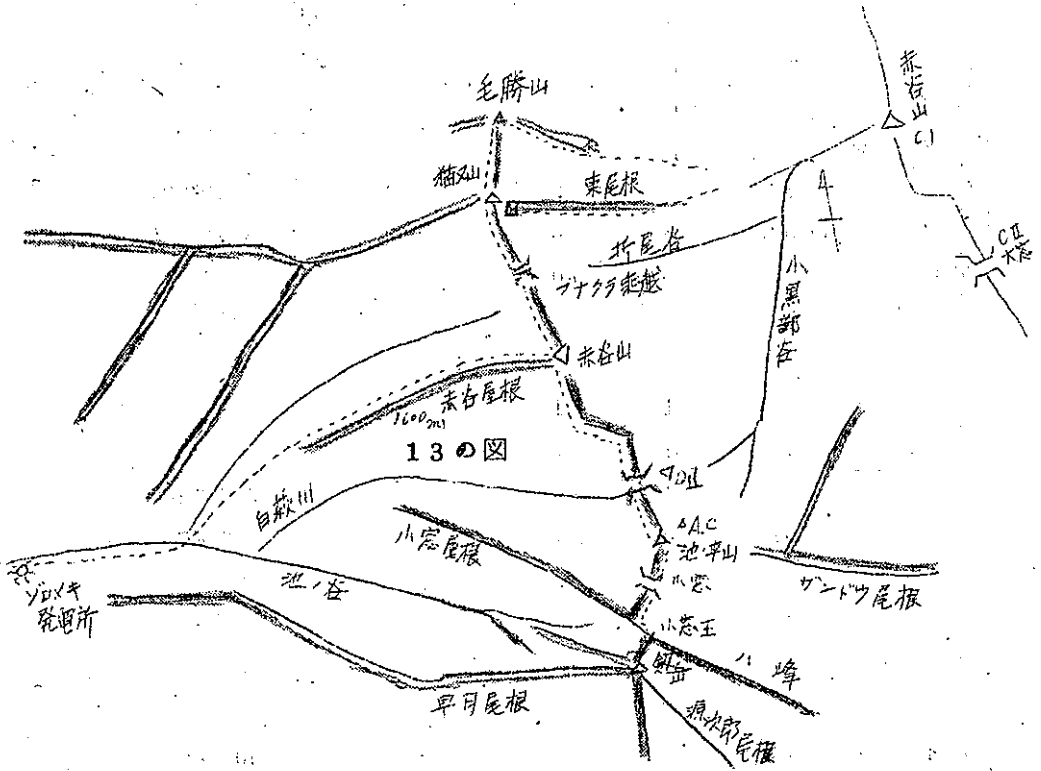
この分家生活は親にも子にも大変勉強になることが多かつた。子供には十分注意をはらわねばならないこと。まわりが暗くなつてガスられた時の行動。etc

(石浜記)



17				フクラ停滞		
18				7 CIの4人とACの8人 C2の5人		
19			毛勝山 7 猪又山 7	畑中 佐々木 細川 加藤 ACの8名	原 豊 坂 平岡 糸井 出雲路	
20				停滞 停滞	停滞	
21				停滞 停滞	停滞	
22				7 加藤 細川	畑中 佐々木 豊坂	
23				7 加藤 細川 畑中 佐々木 糸井	原 豊 坂 平岡 出雲路	栗原 大佐
24				停滞 停滞	停滞	停滞
25				停滞 停滞	停滞	渡部 ← 栗原 大佐
26				停滞 停滞	停滞	停滞
27				停滞 停滞	停滞	停滞
28				停滞 石黒 田 大野 上 新入 3人	原 出雲路 豊坂 糸井 平岡 渡部	栗原 大佐
29				新入 3人 畑中 佐々木 細川	停滞	停滞
30				7 停滞	停滞	停滞
31				ACの8人 豊坂 糸井 出雲路 畑中 加藤 石黒 田	原 平岡	
4月						
1			19			
2	←					19

概 略 図



装備リスト

品名	総数	毛勝	CI	CII	CIII	重量	及び備考
テント	3	(8.8)T2	(120)V2	(80)T1	×	280kg	
ベグ	3組						
スコップ	5	2	1	1	1	0.4	大
ノコギリ	4	1	1	1	1	6.4	
{ ブラシ		1	1	1	1		} One set
{ タワシ		1	1	1	×		
米針	8m	3	2	2	1		ローソク用その他
一ソク	100本	30	30	30	10		3日で2本
張線	40m	10	10	10	10		K-5 mm
ベグ	12本						雪洞用
シウス	5基	2	1	1	1		FIX用(70cm)
ツヘル	4set	1	1	1	1		
杓子	4	1	1	1	1		
メタ	40ヶ	15	10	10	5		3日で1ヶ
ケロ	70ℓ	30ℓ	21	21	7	} 70.0	23罐確保
ポリタン	8	2	2	2	2		(23ヶ-02ℓ)
イフォン	4	1	1	1	×		スベア1
雑布	4	1	1	1	1		茶コン代用
雪温計	4	1	1	1	1		テント各に委任
ナイロン	4本	白	白	2赤	赤		40mザイルN-II
fix	400m					12.32	50m8本K-7
ハンマー	5本	1	1	2	1	2.5	
岩用ハン	90ヶ	10	10	60	10		
氷用 //				2	3		
ツェルト	3張	1		1	1	3.8	

品名	総数	毛勝	CI	CII	CIII	
十カ ラビナ	30ヶ	10	10	20	20	4.26Kg
十捨 土 赤 旗	80m	10	10	40	20	M-8
十 米 気函用	50枚	20			30	
トランスシーバ	1set				0	
ストック	7set	3	4			テント各にジツヘル
テント用フライ	2	1	1			
雪洞用フライ	2	1				雪天 G. S. 代用

1. 米印はテントごとの装備バックに入れるべきもの。他にマジック、ビニールテープ、工具を各々入れる。(カンにブツナ計量)
2. ラジオはテント各にジツヘルすること。(1set入れる電池 Spate 2 sets)
3. エアーマジック修理具はテントごとに委任。
4. 十印は集めて(テント各に)バックする。



	毛 勝	CI	CII	CIII
モ チ 玉 ラ メ リ ケ ン コ 米	5回×7人× 個 35×7 ×1 18×7 ×140g 4×7 ×1.5合	5×4 35×4×1 18×4×140g 4×4×1.5	5×5 35×5×1 18×5×140 4×5×1.5	7×3 34×3×1 17×3×140 4×3×1.5
ア ル マ ク ラ ツ カ ー 十 x 40g カ ン パ ン 十 y 50g 袋 入 リ	5×7 5×7 5×7 16×7	6×4 5×4 5×4 15×4	6×5 6×5 6×5 13×5	5×3 5×3 5×3 16×3
ウ イ ン ナ ビ ー ナ ッ チ ョ コ レ ー ト ア メ	1人1日本 18×7 ×30g 13×7 × 9袋	" 18×4×30 13×4 6	" 18×5×30 13×5 6	" 18×3× 13×3 4×
中 華 ス ー プ コ ン ソ メ チ ャ ー ハ ン ミ ソ カ レ ー ハ ヤ シ	5回×7人×1コ 10×7 ×1 20×7 ×10g 10×7 ×35g 10回 7	5×4×1 10×4×1 20×4×10 10×4×35 10 7	6×5×1 10×5×1 20×5×10 9×5×35 10 7	5×3×1 10×3×1 20×3×10 10×3×35 10 7
ス ー プ 袋	62回分62袋	62回31袋	62回31袋	62回31袋
砂 糖 ス キ キ ム 紅 茶 緑 茶 コ ー ヒ ー コ シ ョ ー ハ イ ミ ー 塩 ラ ー ド ツ ケ モ ノ ニ ン ニ ク	(500g×16コ)+ (200g×4コ) 0+7箱 4かん+12袋 10本+4袋 4ふくろ 10% 2 1kg 2袋 18ふくろ 860g	(500g×10) 4+4 3かん+1袋 6本+1袋 2+紅茶1袋 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 4 4 9 2	(500g×12) +(200×1) 5+5 3かん+6袋 7本+3袋 3 1 2 1 1 2 1 1 2 14 620	500g×2+ 200×14 3+3 19袋 4本+3袋 2 1 1 1 1 1 1 1 1 8 370

春山合宿気象報告

'64年度

'64年度の春山合宿を無事終えたい
ま振りかえつてみるとまで頭に浮ぶの
は連日の悪天候である。
直接日本海の影響を受ける とあつて
は覚悟していたものの例年の春山合宿
の記録からはあのような連日沈澆は考

えていなかつた。
冬山の連日快晴、低気圧の到来を待つ
たなどを考えると1ヶ月ほど週期がず
れているのではないかと思う。
以下簡単に概況ならびに気付いた点
を記す。

月 日	天 気 晴雨、風		
3月11日	○	無 移動高	以外に早く南方海上通過
12	⊙①⊗	弱 輪島沖に①発生	前線と前線との間の晴間
13	⊗	強 冬型上海の④三陸沖の①	
14	⊗①⊙	弱 気圧の峯の到来	
15	○	無 移動高(峯)	
16	⊙	弱 ミツ玉(黄海、ウツリヨ ウ島、セト内海)	
17	⊙⊗=	弱 ミツ玉→ニツ玉 (本州、四国沖)	
18	○	無 三陸沖、満州南部に① 東シナ海④	この好天は④のためより① と①との間の弱い峯のため と考えられる
19	①⊙⊗	強 日本海① (発達996mb)	
20	⊗	強 冬型 三陸沖の①発達 98.0、黄海の④	太平洋岸は晴 ①が余りに強いため④の Speed遅し
21	⊗	// // 千島の①966	
22	⊙	// // (中部以北) 西日本は④の中	
23	○	弱 移動高	
24	⊙⊙	気圧の谷五ツ玉	
25	⊙	日本海、三陸沖に①	

3月26日	⊗	強 冬型	①発達
27	⊗	// 冬型	(27日も冬型)
28	⊙①⊗	// 移動高張り出し 日本海弱い気圧谷 南方に①張り出し	
29	⊗①	関東L発生	
30	⊙ ①	移動高	
31	⊙	弱い移動高	
4月1日	⊗	気圧の谷	

以上まとめると

快晴は11, 15, 18, 23日

その間隔は4日, 3日, 5日

その間に13, 17, 20, 21日
と典型的な冬型の気圧配置となり荒れる。

全般に悪天候だったとはいえずやはり
春山で3~5日周期で変化

低気圧全般

日本海に低気圧がある時は曇ないし
ガスで風も弱く、山は荒れるという
ほどではないがこの低気圧が三陸沖
に抜けると急速に発達、台風なみの
気圧となり黄海のHと対応し強い冬
型となり山は荒れる。

しかし冬のように1週間も吹雪こと
はない。

また太平洋岸の低気圧は日本海側の
山々を大きく荒らすことはない。

二ツ玉について

16(17)、24日に二ツ玉低気
圧があらわれたが17日は急速に回
復

24日のは一つにまとまって強まり
強い冬型となり悪天長びく

二ツ玉と他のL(日本海)の両者にお
いてどちらも悪天をもたらず意味
から差はない

もつとも太平洋岸の山であれば日本
海低気圧の影響が少ないだけ二ツ玉
はこわいだろう。

日本海低気圧の本邦上空通過コース

三陸を北よりに抜けた①は急速に発
達、台風なみの気圧となり、大陸の
高気圧とで強い冬型となり山は雪吹
く

南よりに抜けた①(例17日)は発
達せず

移動高コース

南方コースは一般に数日間の好天気

をもたらすようにいわれているが、
この春山では18, 19, 20日と
南方に高気圧があつたが19, 20日は北
北方上空を低気圧が通過、天気崩れ
る。

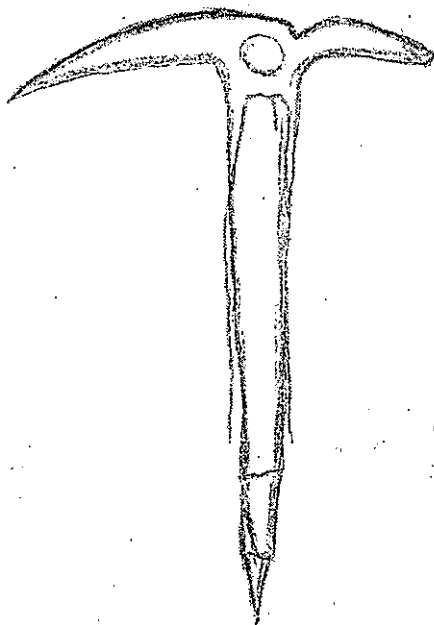
このことからいちがいに南方コース
も数日間好天をもたらすとはいえぬ。

崩雪について

日本海を低気圧が通過するたびにラ
ジオは崩雪注意報を出していたが全
般に気温が低かつたためか大きな崩
雪は目撃できなかつた。

しかし折尾谷の斜面には大きな亀裂
をみる。猫又東尾根の末端にはデブ
リの跡あり。

(記 大野)



1964年度自由山行記録

[4/28~5/3]

◎北鎌〜穂高

[メンバー] 牧野(I)、原、黒田

栗原、横尾OB

4/28 大阪出発

4/29 七倉一千天出合―北鎌沢出合

4/30 出合―北鎌沢コル―天狗の腰掛―独標―北鎌平

5/1 北鎌平―大捨―肩―大キレット―北穂―奥穂小屋

5/2 停滞

5/3 小屋―奥穂―前穂―岳沢―上高地

5/2 停滞

5/3 コル直下―右股―猫又―毛勝のコル―毛勝谷―発電所

[4/28~5/1]

◎西沢

[メンバー] 佐々木、田村OB、笠松OB、田井OB

4/29 七倉―西沢出合―取入口―西沢出合

4/30 西沢出合―三ツ岳―烏帽子小屋

5/1 小屋―濁小屋―七倉

[4/28~5/5]

◎剣北方稜線

[メンバー] 吉川(I)、辻、糸井 佐藤OB、保母OB、高田OB

4/28 大阪発

4/29 上市―馬場島―大窓の途中

4/30 出発―大窓雪溪―小黒部谷へ下りる―池ノ平小屋。白兀沢 偵察、吉川、辻、保母

5/1 池ノ平山往復

[4/27~5/4]

◎佐渡が島金比山

[メンバー] 畑中(I)、加藤、出雲路

4/27 小木―沢根

4/28 沢根―金比山頂―アシトメシミス

4/29 出発―雨石花越―ドンデン池―小芝園

4/30 出発―雨大倉越

5/1 出発—山毛櫛ヶ平山—岩谷口
と黒姫とのコル

5/2 停滞

5/3 出発—芝谷口—大野亀島

5/4 海岸をまわつて、鷲崎まで歩
き船で新潟へ。

[4/28~5/1]

◎能郷白山

[メンバー] 広瀬OB、三好、藤井
山本

4/28 大阪—大垣—濃海—能郷谷

4/29 出発—能郷谷—能郷白山のピ
ーク直下

4/30 出発—ピーク—白谷途中

5/1 白谷—徳山村—大垣

[5/23~5/26]

◎木曾駒ヶ岳—空木岳

[メンバー] 佐々木、大野、辻

[6/4~6/7]

◎後立山

[メンバー] 大野、渡部、平岡

6/4 大阪発

6/5 鹿島部落—赤岩尾根末端—高
千穂平—T. S

6/6 T. S—キレット小屋—五竜
小屋—唐松小屋

6/7 出発—白馬—大雪溪—白馬尻

—細野

[6/5~6/8]

◎鹿島槍北俣本谷

[メンバー] 大笹(L)、糸井、黒
田

6/5 出発

6/6 中岩谷—T. S

6/7 出発—三ノ沢左俣—東尾根—
鹿島ピーク—T. Sへもどる

6/8 T. S—北俣本谷右俣—鹿島
—T S

[6/5~6/6]

◎雪彦山岩登り

[メンバー] 加藤、出雲路、佐々木

[10/10~10/17]

◎南アルプス縦走

[メンバー] 畑中(L)、糸井、黒
田、甲田、藤井、宮崎、三好

10/11 夜叉神—池山小屋

10/12 小屋—北岳—間ノ岳—農鳥小
屋

10/13 農鳥—池ノ沢—雪投沢テント
地

10/14 T. S—塩見—山伏小屋

10/15 出発—荒川小屋

10/16 荒川小屋—コシラ湯—大河原

{ 10/8~10/11 }

◎大峰神童子廻行

{メンバー} 出雲路、加藤

10/8 布引沢出合ー岩小屋

10/9 出発ーノウナン谷出合ーノウ
ナン滝往復

10/10 出合ー稲村と山上のコー山
上ヶ岳ー今宿沢ーブナ又

10/11 出発ー上多石村ー上市

11/1 トンネル経由ー内蔵ノ助平

11/2 停滞

11/3 テントー内蔵ノ助山荘ーカール
通つて帰幕

11/4 2681尾根偵察、途中で引き
返す。

11/5 停滞

11/6 停滞

11/7 下山

{ 10/16~10/20 }

◎剣偵察

{メンバー} 石浜、大笹、平岡、渡
部

10/16 出発

10/17 樺平ー阿曾原小屋ー池ノ平ー池
池ノ平小屋

10/18 小窓尾根周辺偵察

10/19 石浜、平岡、剣往復

10/20 石浜、平岡、赤ハゲ、白ハゲ
小黒部周辺偵察

大笹、渡部、小窓ー池ノ平ー
大窓ー池ノ平

10/21 池ノ平ー阿曾原ー樺平

{ 11/1~11/5 }

◎2681尾根

{メンバー} 牧野、大野、米沢OB

11/1 出発

11/2,3,4 2681尾根偵察

11/5 2681ー雄山ーノ越

{ 10/31~11/8 }

◎剣ボツカパーティー

{メンバー} 石浜、栗原、米井、佐
々木

10/31 出発

11/1 上市ー馬場島ー赤岩尾根取付
の偵察ーブナクラ出合上部

11/2 停滞

11/3 出発ー池ノ谷出合ーテント地

11/4 出発ー大窓ー白ハゲ偵察ー大
窓ー小黒部谷ー池ノ平小屋

11/5 停滞

11/6 停滞

{ 10/31~11/7 }

◎中央山稜パーティー

{メンバー} 吉川(L)、細川、渡
部

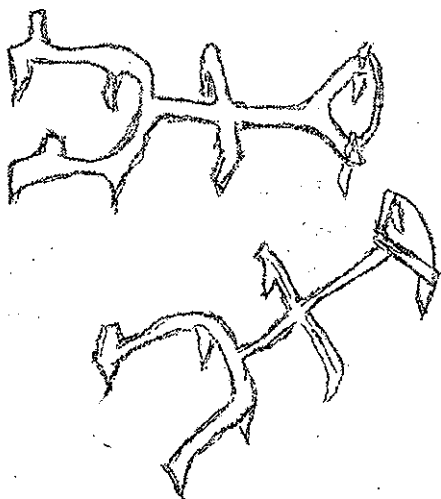
10/31 出発

11/7 ◎池ノ平小屋一小窓コル一池ノ平山

◎池ノ平小屋一小窓雪溪一小窓の頭一三窓一池ノ谷がりー長次郎のコル一池ノ平小屋

11/8 池ノ平小屋一仙人山一仙人小屋一阿曾原一樺平一字奈月

{ 11月富士山雪上訓練 }



1964年度個人山行記録

口元ノタル沢

〔メンバー〕 栗原、渡部、大野、保母QB

〔期間〕 7月26日～8月3日

夏山を前にして考えた時、最近の夏山合宿以後の縦走は、大低型通りの計画が多くなつた。これは勿論、定着合宿の後に行うということから、身体的にも、地域的にもある程度の制約があることからくるのかも知れない。だがやはりそれに対する我々の意欲の不足、研究の不足からそうなることが多いのではないだろうか。今度の夏山の計画を立案するにあたって、メンバー的にも2年以上の中堅部員が集まつた時にもつとちがつた山行をしてみたいという声があがつた。いわば、そう激しい情熱をもっていないが、少しスリルを求める欲求不満であつたのかも知れない。そこでいろいろ策を練つたのであるが、夏山位は人臭くないそしてある程度新鮮味のあるところとして口元の

タル沢が浮び上つてきた。ここは、我部では毎年といつてよい程入つていたが、まだ五月に下つた位のものであつた。又沢の廻行のことに関しても昨年以上の廊下の廻行が終つたし、次に上の廊下の周辺の支沢を見てみたいということであつた。結果的には、我々が当初予想した程、嫌悪な沢でもなく、悪場もほとんどなかつたが、久し振りに充実した気分になつて帰つて来た。

7月28日、東沢の出合のテント地はよい所だ。昨夜は砂のベットでグツスリと休んで、今までの疲労もすつかりとれたような気がする。元気に河原を歩き始めた。最初の徒渉にかかる。おぼけなまこも早朝(?)の水あびにはさすがにびっくりしたらしい。すぐ目がさめた。前に土の廊下の廻行を試みたことのある保母QBの話では、水量は普通だとのことであつた。数回徒渉を繰り返して、下の黒ヒンにやつて来た。このあたりから本格的な廊下になるらしい。入口には左岸にハーケンが2, 3本打つてあつて、水の少く

ない時にはここをへつるようだ。徒渉をするには水量が多かつたので、20m程高捲きをして、懸垂で黒ビンガの中央部の河岸に降りたつた。砂洲を目掛けて徒渉する。水深は腰あたりまでであるが、流れのため胸位まで押してゐる。足をとられて、2、3回、洗礼を受けた。再び徒渉を繰り返して、タル沢の出合についた。いよいよこれからタル沢に入るのだ。流木を燃して服を乾して、気分を新たにす。少し入ると第一の滝があらわれた。10m位の落差があり、上はナメ滝になつてゐる。なんなく横をへつた。水量も少なく、岩もレンガを積み重ねたような赤ちやけた岩で、簡単に登れた。沢を十分程登つたところに人の歩いた橋のようなものがかかつてゐた。ここには初めて来たものと思ひこんでいた我々は少しガツカリした。(後でそれは高天ヶ原新道であることがわかつた。) 気をとり直して、登り続けると20m程の幅の広い滝にぶつかつた。左岸のブッシュを高捲いた。後は又階段上の岩をへつたり、沢の中をジャブジャブ歩いた。F. 11は右岸を20m程登りナメ滝を越えると向いの木挽の尾根も大分みえて来た。このあたり今日の仮の宿となるだろう。流木をふんだんに燃やして、ビグアークとはいえ快

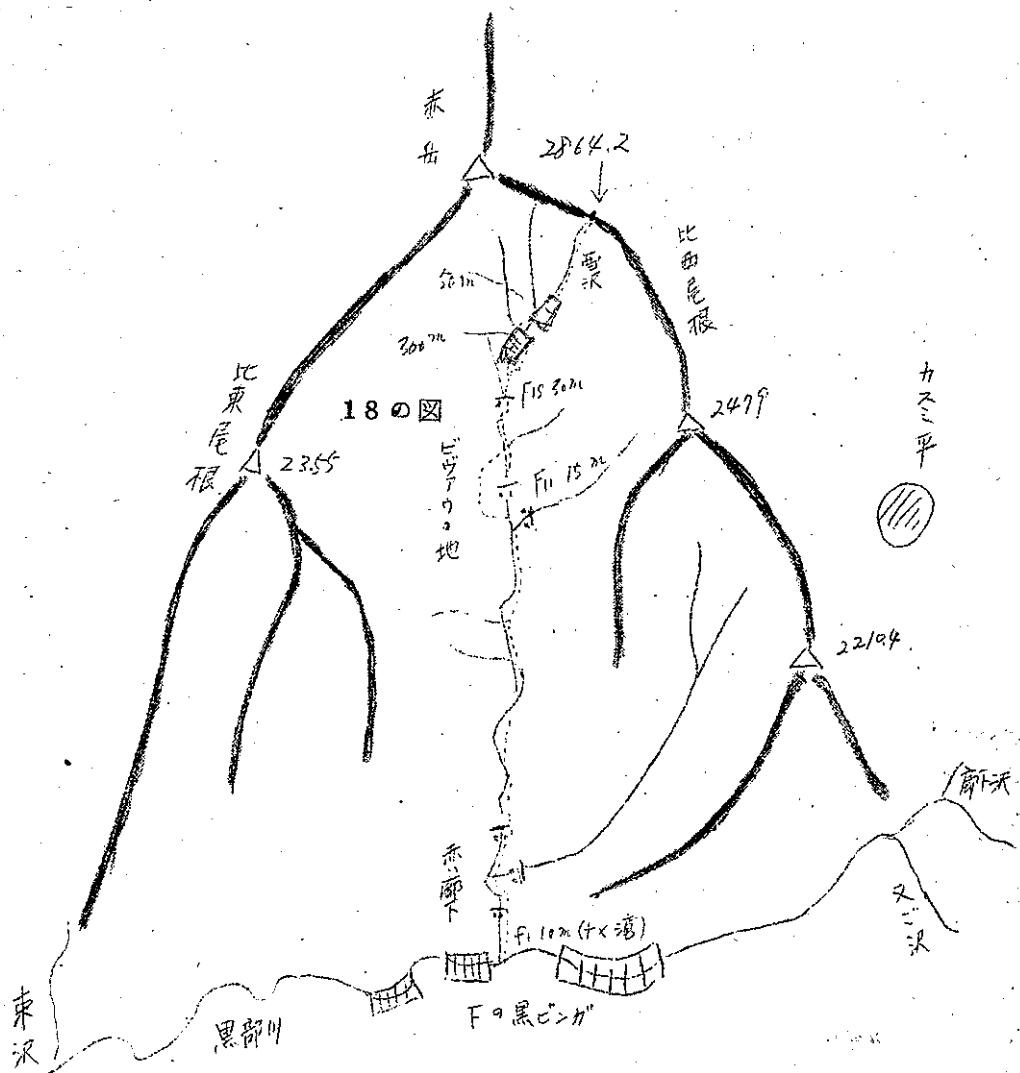
適な宿だつた。

7月29日、昨日でこの沢の核心を越えた様だし、相当の高さに来たようだ。水量も増々少くなつて、今日は楽業と赤牛に着きそうだ。ほとんど悪場もなく、順調に登つて行く。かう場を階段を登る様に行くと早くも北田尾根のコルが見えて来。コルにでると一望のもとに北アルプスがながめられた。ラジウスを出して腹ごしらえをし、帰途の用意をする。

(記 栗原完治)

時間記録

7/28 沢出合(7:35) - 下の黒ビンガ(8:45) - タル沢出合(11:15) - タル沢出合出発(12:45) - F11(15:35) - ビグアーク地(16:40)
7/30 出発(7:20) - 赤牛北西尾根(11:20)



1 9 6 5 年 度 記 録

C . L 原 治 左 工 門

S . L 石 浜 高 明

〔リーダー所感〕

— 40年度を顧みて —

原 治 左 二 門

我々は、富士山での遭難の翌年に入部し、二度と遭難は起こすまい、着実な山歩きをと決意を新たに合った当時の現役部員たる先輩達の中に育ってきた。それから4年目、遭難を体験していない世代が部を運営する立場になつた訳である。リーダーを引受けるに当つて我々の取るべき態度と云えば、要するに遭難を起こさず、部の再出発以来の諸々の山行を着実に発展させることだと考えた。あとはリーダーグループの出来る丈一致する方向での各山行があるのみである。

折から8、4年部員だけで十数名。メンバー、実力共に何かやるにもまず不足のない状態となつた。我々は剣に入りたいという希望、安全性並びに個人の實力発揮も考えて春山は全員剣の北方稜線へ入つた。がしかし、初めからある程度分つていたことだが、全員が一つことに当るには

やはり問題がありすぎた。部の安全性という名のもとに多数の個人を眠らせすぎたようだ。各個人の自主性の殆んどない山行になりすぎたきらいがある。これは各人の意識の問題を云々する以前の問題も多分に含まれていたのだろう。

つぎに部に具体的目標を設け得なかつたことも各山行をばく然としたものにするに効果があつたようだ。いつの時代でもあることだろうが、十人十色、全員が一丸となつて当るべきような山行はそうあるものではない。P、29 遠征が宙に浮き、現役だけの遠征計画もまだでてくるような雰囲気でない現況下で我々は何を目標にして動くべきか。一人歩きのできる登山者の養成をと考え、実際登山学校方式的な態度で一応はのぞんだものの、それに徹するでもなく強いて努力を払うでもなかつた。その方がベターだとは思ひ切れなかつたのである。人生のそれと同様も

つと山登りの本質に近づけるような目標、方策の必要性を痛感した次第であるが、そういったものも着実な山登りを推し進めてゆくうちに必然的にでき上つてゆくもので、強いて目標だの目的だのと云える段階ではなかつたのだらうと今は考える。たゞ合宿だと云えば又かといったような顔をし、参加しなくてもよければ参加しないという態度が多々見受けられたのも、あながち個人の部意識の低さゆえではなく、部の方針計画運営、山行形態等々に問題が多い結果だと思われる。マンネリ化した従来通りの部会、トレーニング、合宿等々をただ踏襲していくばかりでは問題は解決しそうになかつた。ここいらで再考すべき時だらう。

遭難を起こしてはならないというのは当然だが、兎に角ぶつかつてみるというような積極さに欠けていた事実、何かにつけて消極的になりがちだった事実は、遭難に対する過度の警戒心のいたす所とは云え、遭難はそれのみによつて防げるものではない以上、リーダーシップのまずさ、欠如といえるだらう。又部に積極的な雰囲気が出てくる芽をつんでいたことも深く反省される所である。

一方、全クラブが総力を結集してという悲愴感にも似た感じを抱いてぶつ

かるような対象がなくなり、各個人の山に対する態度も多様化してゆく現在に於ては、あくまでも個人というものに主眼を置きできる限り小人数の山行を試みるのも一つだし、又山登りは一生にわたつてじっくりやればよいという態度からガツガツせず着実な山行を積み重ねていつたつてよかるう。結局後輩達が徐々にいい方向へもつていつてくれるだらうと今では思っている。問題があればとことんまで話し合えばよい。結論を急ぐことはないのだらう。

1965年度夏山合宿

我々は、一昨年、昨年と二年にわたり立山東面に入った。立山東面では人に会うことは殆んど無く、心ゆくまでその静けさの中で、純日本的な夏山を経験したが、やはりなんといつても岩登りの対象としてはスケールが小さいことは否めない。上級部員の中にも今度はタレ振りに、思い切り、雪と岩を相手にしてみたいという気持ちが強くなり、今年度夏山は二股にベースをおいて合宿を行うことになり、それと共に2回の合宿でもトレース出来ずに残っている丸山の壁と別山沢左俣を対象に加えたいが、連日の雨にたたられ、実際に行動できたのは雪上訓練も入れて8日間であつた。丸山の壁や別山には取り付くことも出来なかつた。又縦走中、不帰で事故をおこしたことは、まことに遺憾な出来事であつた。事故後の反省を肝に銘じて、慎重に行動せねばならないと反省している。今度の合宿のように梅雨も明けきらずに出発し、例年より遅い梅雨明けともあいまつて、大幅に計画を縮小せざるを得なかつた

ため、来年度の夏山は、梅雨を充分に考慮に入れなければならないと考えている。

(記 原 治 左 門)

〔期 間〕 65年7月14日

～27日

〔メンバー〕 O, L原(S4), S, L石浜(T4), 大笹(T4), 栗原(J2), 渡部(S2), 大野(T3) 佐々木(S3), 細川(T2), 糸井(E3), 辻(T3), 黒田(M3), 加藤(T2), 甲田(S3), 藤井(S2), 三好(T2), 岡田(J1), 甲田(Σ1), 竹林(Σ1), 田中(T1), 長岡(L2), 松川(T1) 的場(Σ1), 山田(T1)

〔行動概要〕

7月14日 夜

先発(糸井, 三好, 甲田, 的場, 山田)

7月15日 夜

本隊出発 原以下残り部員

7月16日 晴後雨

称名小屋—大日平、ボツカ

7月17日 雨

大日平—大日小屋—奥大日の肩

7月18日 雨 停滞

7月19日 快晴

奥大日—別山乗越—二股

7月20日 晴後雨

長次郎谷熊ノ岩付近にて雪上訓練

7月21日 曇後雨

三ノ窓往復 三ノ窓にてアイゼン練習

7月22日 くもり時々雨 停滞

7月23日 雨 停滞

7月24日 雨後曇後晴 停滞

7月25日 快晴

雪上訓練、長次郎雪溪〇後平蔵谷を下

る

〇三ノ窓を下る

7月26日 晴

◎源次郎尾根 加藤、三好、竹林、長岡

II峰の懸垂下降で2時間の人待ち。

◎本峰南壁 大笹、岡田

アプローチに源次郎尾根を通つたため、人待ちで南壁を上る時間なし

◎六峰Cフェクス 大野、糸井

リッジ・ルートをとる。じゆうづなぎに人が登っている。

◎チンネ 原、佐々木

中央チムニー、gチムニー、Cクラック、aクラック

◎八ツ峰上半 辻、藤井、的場、甲田

(1)

◎八ツ峰下半 渡部、山田

◎六峰Aフェイス 細川、黒田

◎八ツ峰上峰東面三ノ沢 甲田、T.

K、田中、松川

7月27日 晴後ガス

◎剣尾根上半 大野、加藤

ガスが濃く天気待ちしたが、よくならず引返す。

◎源次郎尾根、糸井、甲田(2)、松川

◎八ツ峰上半 黒田、田中

◎八ツ峰下半 細川、三好、岡田

◎チンネ 大笹、渡部

下部左稜線—aバズドbクラック

◎六峰Aフェイス 栗原、辻

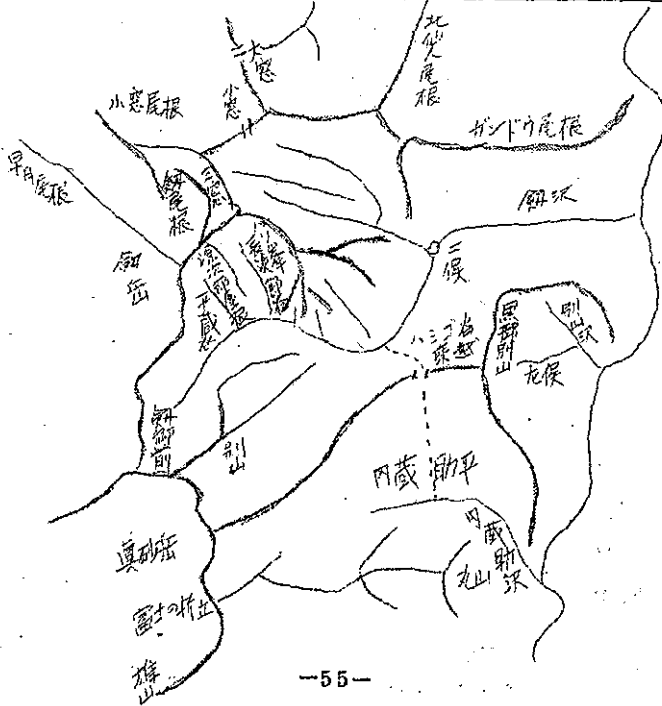
◎北方稜線 佐々木、藤井、竹林

二股—大窓—池ノ平山—二股

◎内蔵、助平原、甲田、的場

個人行動表

学年	氏名	26日	27日
4	原 浜 石栗大 大	チンネ 足首ねんざのため下山 三ノ沢 源次郎尾根	内蔵ノ助 六峰Aフエイヌ チンネ
3	渡部 野川 大細 々々 佐木 井藤 糸加 黒田 黒 辻	八ツ峰下半 六峰Cフエイヌ 六峰Aフエイヌ チンネ 六峰Cフエイヌ 源次郎尾根 六峰フエイヌ 八ツ峰上半	チンネ 尾根上半 八ツ峰下半 北方稜線 源次郎尾根 尾根上半 八ツ峰下半 六峰Aフエイヌ
2	甲田 田 藤三 井好	三ノ沢 八ツ峰上半 源次郎尾根	源次郎尾根 北方稜線 八ツ峰下半
1	岡的 田場 甲松 田川 竹長 林 山田 岡田 山 中	源次郎尾根 八ツ峰上半 // T. K 源次郎尾根 // 八ツ峰下半 T. K	八ツ峰下半 内蔵ノ助平 // 源次郎尾根 北方稜線 T. K T. K 八ツ峰下半



縦 走

1. 常念パーティ 糸井、岡田、山田、中村 (OB)

- 7月28日 二股一雷鳥
- 29日 雷鳥一五色
- 30日 五色一平一東沢出合
- 31日 東沢出合一赤牛岳一高天原
- 8月 1日 高天原一水晶岳一温泉沢一高天原
- 2日 高天原一薬師沢出合一祖父平
- 3日 祖父平一黒部乗越
- 4日 黒部乗越一槍
- 5日 槍一新穂高

台風 (15号) 襲来のため槍から下山し常念パーティとは名ばかりとなつた。

2. 槍パーティ 辻、出雲路、三好、甲田、竹林、松川

- 7月28日 二股一雷鳥
- 29日 雷鳥一御山谷出合
- 30日 御山谷出合一南沢の途中
- 31日 一烏帽子
- 8月 1日 烏帽子一三俣蓮華
- 2日 三俣蓮華一水晶岳一高天原一雲ノ平一三俣
- 3日 三俣蓮華一中岳
- 4日 中岳一奥穂小屋

8月 5日 奥穂小屋一西穂一上高地

3. 朝日パーティ 大野、甲田 2、田中

- 7月28日 二股一一ノ越下部
- 29日 一白滝峡 (ヘンノ木平から30分の所)
- 30日 停滞、散歩
- 31日 白滝峡一祖母谷温泉
- 8月 1日 祖母谷温泉一唐松
- 2日 唐松一白馬一鉢岳
- 3日 鉢岳一小川温泉一下山

4. 清水谷パーティ 黒田、細川、横尾 (OB)

- 7月28日 二股一房治一二股
- 29日 二股一樺平
- 30日 停滞
- 31日
- 8月 1日
- 2日 清水谷一蓮華温泉
- 3日
- 4日 蓮華温泉

5. 後立山パーティ 渡部、長岡、的場

- 7月28日 二股一雷鳥
- 29日 雷鳥一五色
- 30, 31日 停滞
- 8月 1日 五色一スゴ
- 2日 スゴ一ベツケ原
- 3日 カベツケ原

カベツケ原

6. 穴毛谷パーティ 佐々木、加藤

4日 カベツケ原—高天原

藤井

5日 高天原—赤牛—東沢出合

7月28日 二股—雷鳥

29日 雷鳥—廊下沢途中

6日 東沢出合—平—針ノ木峠

30日 一高天原

31日 停滞—加藤下山

7日 針ノ木峠—種池

8月 1日 高天原—五郎沢出合

8日 種池—鹿島槍吊尾根

2日 五郎沢出合—黒部乗越

9日 鹿島吊尾根—唐松

—双六—新穂高

10日 停滞

穴毛谷が目的であつたが目的地に

11日 (事故)—唐松小屋

つくまでにてダウンした。

12日 唐松小屋にて停滞

13日 唐松小屋—細野

65年度夏山合宿装備表

品目	ボツカ	縦					走		総数	総重量
	定着合宿	朝日	後立	槍	常念	穴毛谷	清水谷			
テント No.1	○			○				1		
No.2	○							1		
No.3	○	○						1		
No.4	○		○					1		
No.5	○				○			1		
サブマリン						○		1		
ツェルト	4		1			1	2	4		
ザイル麻40m	3	○		○		○		3		
#30m	7		○		○			7		
ナイロン40m						○	○	2		
捨 繩	60m		5m	15m	5m	20m	10m	60m		
フィクスザイル	2							2		
ヘルメット	8					2		8		
ハンマー	15	1	1	2	1	2	1	15		

品名	定着合宿	朝日	後立	槍	常念	穴毛谷	清水谷	総数	総重量
ハーケン	100	4	4	5	5	25	10	100	
カラビナ	60	4	3	4	4	9	6	60	
アブミ 二段	10					5	1	10	
// 一段									
埋込セット									
// ハーケン									
鍋	1			1				1	
ポール	3	1						3	
コツヘル	8	1	2	1	2	2		8	
やかん	2			1				2	
たわし	3	1						3	
お玉	5	1	1	1	1	1		5	
ノギ	2		1					2	
リタ	2	1						2	
うちわ	3			1				3	
火吹竹	2			1				2	
ペンチ	1							1	
秤	1							1	
針金	若干	若干	若干	若干	若干	若干	若干	5m	
ローソク	30	4	6	10	6	5	4	65	
ラジウス	6	1	1	1	1	1		6	
石油コンロ	1							1	
石油	32ℓ	3	4.5	8	4.5	2.5		54.5	
メタ	14ヶ	2	2	5	4	3	3	33	
ポリタンク	5	2	2	2	2	1		9	
ラジオ	6	1	1	1	1	1	1	6	
電池スベア	0	0	0	0	0	0	0	0	
赤布	6							6	
天気図用紙	30	20	30	30	30	30	20	190	

○ラジオ及電池スベアは各 party が確保の事。

Essen表

朝 米 1.3合(飯ごう3人に1つ)

味噌汁 ワカメ4袋 玉ネギ

味噌2袋

昼 サンリツパン 1人1袋

ビスケット 1人1本

クラッカー 1人150g

ウインナーソーセージ 1人1本

チーズ 1人1個

マヨネーズ 3人に1本

アメ玉 1人3コ

{印はその内の1つを使用する

ジュース 1人1袋

夜 米 1人2合

カレー汁 ジャガイモ 玉ネギ 各5 肉600g

チャップ汁 ジャガイモ 玉ネギ 各5 キャベツ1

ミソ汁 ワカメ4袋 ジャガイモ 玉ネギ各5

ハイミ汁 ジャガイモ 玉ネギ 各5 キャベツ1 肉600g

漬物塩コブetc(Essen代金の余りがあればの話期待しない事)

その他砂糖、緑茶、紅茶、スキムミルク 塩 コシヨウ、ハイミ

ラード

夏山合宿医薬品リスト

分類	薬品名	携行量			
抗生物質	スピラマイシン	50T	1回1錠 6時間間隔		
	アクロマイシン	12T	総ての発熱性、化膿性疾患		
	ペニシリン	40g+10T	外傷における化膿防止		
鎮痛下熱	ザクチリン	10T	頭痛、歯痛、生理痛		
	ハイピリン	50T	37℃前後の微熱(風邪)に使用		
	アナレキシン	20T			
鎮 剂	ブスコパン	10T	痙攣疼痛(激しい胃ケイレン 後痛)		
	レジタン	15T			
下痢止	エンテロヴィオフォルム	30T	1日 1~2錠		
腹 痛	フラドリゾン	8T	1回1錠4~6時間間隔		
	カルバルゾン	30T	赤痢etcにも有効		
止 血	アドシー	10g			
	G-アドクノン	12T			
下剂(整腸)	ビカール	10T			
鎮咳、抗ヒスタミン	エントラ	2ビン	風邪、かぶれ、じんましん		
胃腸薬	トリジャー				
虫 歯	ツーボン	6			
眼 薬	新ロート	2			
自律神経安定	オリバー	10T			
アンダントールゼリー	1	赤チン	6	体温計	3
KC軟コウ	4	リパゾール	6	ガーゼ	
外傷用 "	5	アルコール	1ビン	ハウタイ	
				バンソウコウ	

- ⊙ 〇山日記をよく読むこと。処方の前には必ず説明書を読むこと!!
- 〇持病持は各自用意してくること。
- 〇ビタミン(B, C) 胃腸薬(クレオソート)は各自用意

1965年度冬山合宿

去年大町トンネルの通行許可が得られず、直前になつて断念した立山東面の二本の尾根をトレースするプランは当然今年に持ち越され、5月以来数回の偵察を重ねてきた。然しながら今年も又、トンネルの通過が許されず、去年と全く同じように冬山間近になり、断念のやむなきに至り、他に合宿を求めざるを得なくなつた。そこで部内に縦走形式で冬の稜線を歩きたいという空気も強かつたので、今年は先ずその手始めとして、後立山の南部と、燕岳一常念岳をその対象とした。この計画が決定された事情、それに今迄での我々の冬山とは異なつた形式であることを考えあわせると、相当厳しい覚悟をしてかからねばならないと思つた。一方本年も又、新人は樺池に独立した合宿をもち、スキー練習によつて、雪に慣れることを目的とし、その間に小連華岳を往復した。本年度のこの冬山合宿も無事終了し、目標である冬期の縦走及び稜線上での露営に何らかの手掛りを得ました。これを基にして、より

困難な、より高度な山行を行いたいと思つてます。樺池合宿もこの2~3年にならぬ冬山本来の姿に接し、非常に成果が上つたことと考えています。最後になりましたが、篠田先生、監督ならびに諸先輩方の助力により合宿が無事終了したことを記します。

(O. L 原 治 左 門)

後立山パーティ (鉢ノ木、赤沢、鹿島槍)

〔期間〕'65年12月23日~

'66年1月2日

〔メンバー〕O. L石浜高明(T4)、S. L栗原完治(J2)、医療、渡部洋(S2)、装備、糸井文彦(E3)、食糧、加藤佑二(T2)、気象、辻信男(T3)、

〔行動概況〕

12月22日 先発4名大阪出発

12月23日 雪

関電扇沢駅出発(10:00)~大沢小屋(12:00~12:50)~

関電(13:20~14:25)一大
沢小屋(15:50)

大沢小屋まで、一回では無理なのでダ
ブルボツカをする。後発2名出発

12月24日 雪

出発(8:15)一デボ地(11:
30)一大沢小屋(12:30)

昨日、重大な落し物をしたのに気付き、
辻、渡部はその調達に下る。石浜、糸
井は尾根へデボに向う。尾根の下部は
広いが、リツヂに出るとかなりやせて
いる。約2000mの所でデボ。重大
な落し物はテントのフレームの一番上
の曲つたやつ。

12月25日 雪

出発(7:15)一デボ地(10:
10)2100m(10:45)

昨夜来の雪でトレースは殆んど消えた
が、ラツセルに精出し案外早く210
0m地点につく。テントを張り、渡部、
加藤の2名で昨日のデボ回収。

12月26日 雪後曇

出発(7:20)一稜線(9:20)
一2100m(10:45)稜線(1
2:00)。

今日も雪、ダブルで稜線に出ることに
する。山岳巡礼クラブのトレースが残
っているが、膝位までもぐる。傾斜が
きつくシンドイ。尾根と稜線のジャン
クションはピークをなしておらずガス

られたら判りにくかるう。稜線のすぐ
下にかつこうのテント地を見つけて設
営。

12月27日 快晴

◎鉢ノ木岳アタック 糸井、辻

出発(6:30)一ズバリ岳(9:
00~9:10)一鉢ノ木(9:50
~10:30)一テント(11:20)
モルゲンコートに輝く立山、を眺め
ながら鉢ノ木へ向う。ズバリ直下が少
し悪場だつたが、たんたんと進み鉢ノ
木岳へ立つ。

◎赤沢、鳴沢偵察、渡部、加藤

出発(7:00)一赤沢(8:00)
一鳴沢(9:00)一引き返し点(1
0:30)一テント地(13:30)

12月28日 曇

出発(7:05)一赤沢(8:05)
一鳴沢(9:15)一新越乗越(10
:45)一岩小屋沢岳(12:30)
一種池(15:00)。

赤沢へ向う頃は少し風があつたが、そ
れも次第にやむ。鳴沢の下り以外に悪
場ない。ボンボンはまるハイ松に悪態
をつき、思いの外遠い種池に不平をい
う。

12月29日 曇

出発(9:15)一種池小屋(10
:00)一爺雨峰(11:30)一テ
ント地(11:45)。

爺のピーク付近で風が出たが、ピークを少し下つたところにテントを張る。朝のうちはガスついていたがガスも晴れた。

12月30 曇時々晴後風雪

出発(7:05) - 冷池(7:55)
一鹿島槍ヶ岳(9:45~10:30)
一冷池(11:15) - テント(12:50)

気圧配置が冬型となり、天候悪化は目に見えているので、冷池までとばす。冷池から南鹿島槍までは剣も見えていたが受々雲がひろがり、帰りの爺あたりで強烈な風雪にあり。鹿島槍アタックに出かけた栗原、加藤、糸井の3名をテントでは心配していたが、無事テントに帰ってくる。予定を全部終え、皆で喜び合った。後は安全に下山するのみ。

12月31日 風雪、停滞

1月1日 風雪、停滞

1月2日 風雪

出発(9:45) - 扇沢(3:30)
一扇沢出合(4:00)
風雪は衰えないがテント徹収、予想に反して尾根のずつと下手で風にたたかれる。

表銀パーティー(燕岳-常念岳)
〔期間〕'65年12月24日-'6

6年1月30日

〔メンバー〕C, L畑中薫(M3)
S, L, 大野義照(T3)、出雲路敬孝(T3)、佐々木義弘(S3)、黒田治郎(M3)、藤井昭彦(S2)

〔行動概要〕

12月24日 雪

中房温泉(10:00) - 合戦小屋(15:15)

雪は中房で1m弱、合戦小屋で1.5m位であつた。

12月25日 雪

出発(8:15) - 燕山(10:00~10:35) - 合戦小屋(11:05~12:00) - 燕山荘(12:40)

昨晩からの雪でラツセルを強いられそうと見て、今日はデボしようというわけで出たが、ラツセルは大したこともなく、残りのを取りに引き返した。

12月26日 雪後地吹雪

出発(11:25) - 燕岳(12:00) - 帰着(12:37)

風も強く、天気も悪い。燕岳へ行く。風がきついたので稜線上に雪はほとんどない。

12月27日 快晴

出発(7:30) - 大天井岳(11:45~12:15) - 常念小屋(1

5:30) 蛙岩には先行パーティのfixがあつたので使わせてもらう。アイゼンガチャガチャ。

12月28日 曇 風強し 停滞

12月29日 曇

出発(7:50) - 常念岳(9:45) - 常念東尾根(2033m)(15:20)

昨夜の雪で常念までラッセル、東尾根の上部は細い岩稜。2661m三角点よりかなりの傾斜で下つている。ガスられたら方向を間違ひおそれがあるだろう。

12月30日 曇後雪

出発(7:45) - 1596m三角点(10:15) - 尾根末端(12:15) - 鳥川橋(14:35)

ガスられて注意しながら下る。最後の急な斜面を下ると道があつた。あとは一路須砂渡へ。

新人栂池合宿

〔期間〕'65年12月24日～'66年1月3日

〔メンバー〕O, 4原(S4)、大笹(T4)、的場、山田、竹林、甲田、田中、岡田(各1年)、牧野、米沢、三沢、梶本、吉川(以上O, B, 5名)

〔行動概要〕

12月24日 雪 千国一沓掛

25日 雪 沓掛一阪大栂ノ木寮(神ノ田圃)

26日 雪後曇 天狗原往復、荷の一部デボとスキー練習

27日 晴 栂池でスキー練習

28日 曇後雪 栂ノ木寮一天狗原、OB2名加わりシールボツカ。天狗原にテント設営。小蓮華へ行きかけたが、天候悪化のため中止。

29日 曇 小蓮華往復(原、大笹、新人6名、牧野O, B)

30日 地吹雪 スキー練習(米沢コーチ)

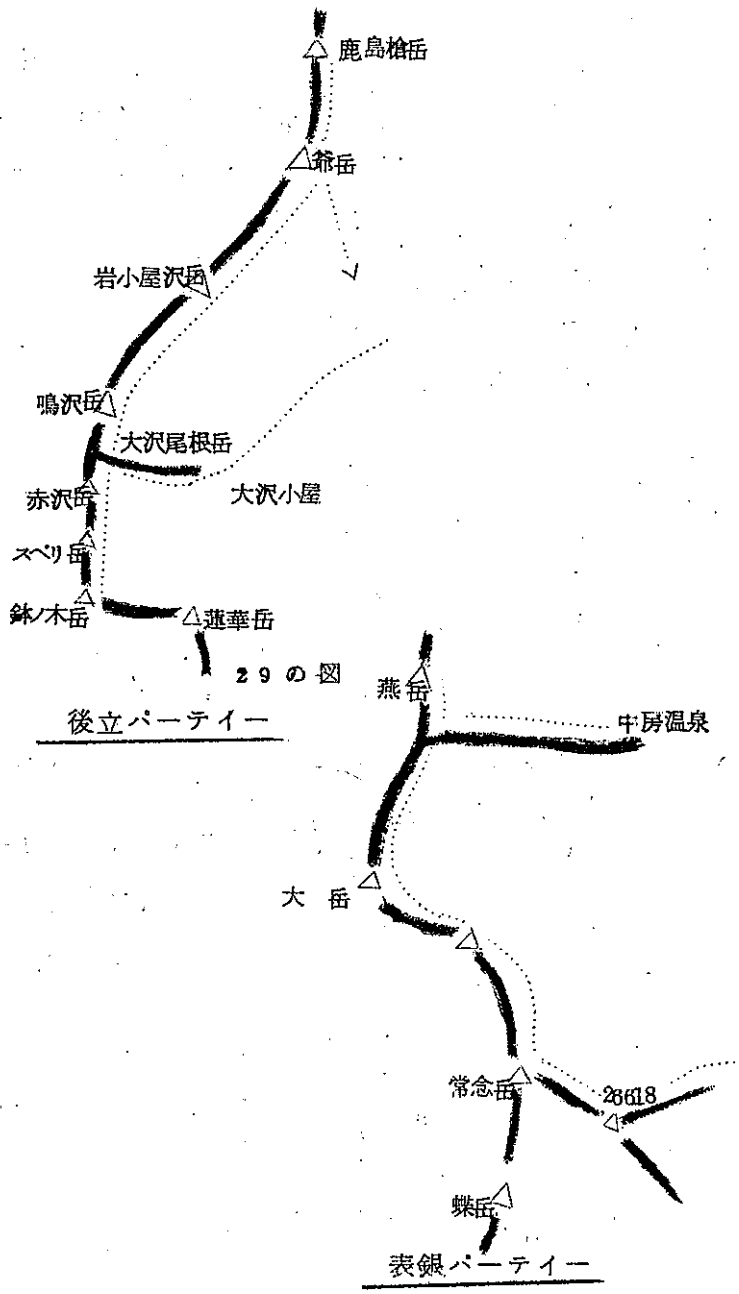
31日 // //

1月1日 // //

午後雪洞掘り、梶本、吉川O, Bテント入り。

1月2日 地吹雪 スキー練習 住吉、酒井、前沢、打出O, B連、顔を見にくる。

1月3日 撤収。(大笹、的場、山田、竹林は下山、残りは小屋で遊ぶ)



29の図

後立パーティー

表銀パーティー

冬 山 装 備 表

品 目	表 銀	鉢ノ木	樽 池	重 量	備 考
テ ン ト	T2	T3	V2V3T1	50.3	
ベ グ		19(11)			()はジュラミン製
張 線 予 備	6m	6m	18m		
ザ イ ル	1	2	1		ナイロン40m
フイクスザイル		50m			
ハ ー ケ ン	6	8(2)	4		()はアイスハーケン
カ ラ ビ ナ	6	6	6		
ト ン カ チ	1	1	1		
ラ ジ ュ ー ス	2	2	3		
メ タ	5	6	15		
チ ロ	13ℓ	15.6ℓ	26ℓ		
ロ ー ソ ク	8	10	20		
お 玉	1	1	3		
コ ッ プ エ ル	2	3(1)	6(3)		()はボール
ポ リ タ ン	2	2	3		
タ ワ シ	2(1)	2(1)	6(3)		()はブラシ
ノ コ ギ リ	1	1	1		
ス コ ッ プ	1	1	3		
針 金	少	〃	〃		
捨 繩	10m	10m	10m		
天 気 図 用 紙	32枚	48枚	2冊		
ラ ジ オ	1	1	1		予備電池つき
赤 布	10(0)	50(30)	20(15)		()は竹つき
サ イ フ オ ン	0	1	1		
雪 温 計		1	1		
ツ エ ル ト	1	2	1		
ス ト ッ ク		2			
総 重 量					

食料計画

鉢ノ木P (6人分)

行動食 8日分(朝食)B (昼食)L (夕食)D

停滞食 10日分(//)B'(//)L'(//)D'

他にスープ袋Su, デザートS

主食	米	回数	モチ	回数	小麦粉+シシ	回数	めん類	回数	乾パン等	回数	合計
B	210+S	2	230+S	3	160+S	2	150+S	1			8回
L									160蛋白20	8	8回
D	210+S	4	230+S	1	170+S	2	160+S	1			8回
B'					150+S	5	150+S	5			10回
L'									150蛋白10	10	10回
D'					160+S	5	150+S	5			10回
重量	1200g	6	720g	4	2210g	14	1810g	12	2780g	18	8980g

Su : 20gのラード, 25gの蛋白質, 10gの調味、香辛料を含み合計60g

60×6=360g づつに分けて36個入用。

付 他にしいたけ、カンピョウ、生野菜(ピーマン)、ニンニクを含んだ重量

S : デザート 1人1日30~40gのアメ玉、キャラメル、チョコレート、甘納豆、レーズン等がつく。40×3=120gのつつみを二個使う。

L 蛋白20g Or { チーズ18g (1回6人で1/4ポンド使用) 計2ポンド
ウインナ25g (1人1日1本) 計48本

L 蛋白10g Or { チーズ9g (1回6人で1/8ポンド使用) 計1.5ポンド
ウインナ12.5g (1人1日半本) 計30本

その他 1. 砂糖 30g×6×15=2.7kg(700g×4)

2. 紅茶、緑茶

3. 香辛料、味の素、塩(少しづつ)

(重量) 14860g 770g/人日 ○総計(770g+ケロ180g)×13=16200g

表銀P (6人分)

朝 { インスタントラーメン 5袋
スープ袋 1
モチ(1人6~7個)、スープ袋1、インスタント味噌汁12人分
ダンゴ(メリケン粉750g+スキム150g)メザシの桜干、インスタント味噌汁12人分
ダンゴ(//)スープ袋1、ハシ 12皿分
インスタントラーメン 5袋 メザシ Or サクラボン

昼	カンパン	900g	チーズ	6	甘納豆	1袋
	クラッカー	900g	ウイナ	6	水砂糖	1"
	アルマ	8本			アメ玉	1"

晩
 タンゴ(メリケン粉750g+スキム150g)、スープ1、ハイシ12サラ分
 オシヤ(米5合、塩タラ、キャベツ1/5、塩コブ)
 米飯(米8合)鯨チキ(1人60g)クノールスープorインスタント味汁
 ホットケーキの素(750g) バター半ポンド
 カンパン1kg メザシO.T.サクラボン

その他紅茶、緑茶、塩、砂糖、インスタントココア、ラード、コシヨウ
 Essenを軽量化すべしとの至上命令で上記の如き Essen計画が出来上つた。
 3日分を朝晩インスタントラーメンとカンパンのみにしたこと問題あると思わ
 れるがゲルの問題もあり止むを得なかつた。このような方法が本来の意味での
 軽量化になつていないことは十分承知しているが・・・。
 尚上記の Essenの内モチ、米飯は使用回数が少ない。

新人P(1人分)

朝	中華ソバ(インスタント)	2袋		170g
	焼ソバ(//)	2"		170g
	乾パン	1"	マギースープ 1/2	200g

昼	バタークラッカー	2袋	ジャム 1/3 チーズ 1 ウイナ 1	200g
	ビスケット	1 1/2本		
	フランスパン	2コ		

晩	米2合		280g
	カレー汁	鯨肉(50g)玉ネギ、ジャガイモ、人参、キャベツ ニンニク ラード コシヨウ	250g
	ハイシ汁		
	八宝菜		

重量 900~930g/人日
 他に紅茶、緑茶、塩、砂糖、ソース等

1965年度 春山合宿

昨年の春は、剣北方稜線でポーラ合宿を行ったが、いろいろな点で問題があった。今年は縦走形式でやろうということになり、プランをいろいろ出しあって検討してきた。一応槍から剣までと決定し、細かい点の検討に入ったが、冬山合宿の後、リーダーシップの交代のあとのトレーニング、部会の出席が話しにならない程悪く、何か積極性がもう一つ欠けていたように思われる。かつ又合宿参加メンバーもまぎわまで決まらず、気持のよい出発ではなかった。上級生がこういう態度を改めない限り、山行のレベルダウンもやむをえないだろう。「色気も食気も結構、しかしそれだけでは困る」と我々が新人の時、上級生にいわれたが、今なお我々の登山はその域を脱していないように思われる。

さて、今年の春は、天気の周期が早く、いわゆる春山らしい天気も余りなく、三俣までは計画いっぱいに進んだ。がとにかく太郎まで縦走し、薬師往復の後、無事新人を下すことができた。この間実働10日ほどであったが、パテルものもなく、新人はよくがんばっ

たと思う。剣までの縦走隊は太郎で別れたのであるが、その後3日間ほどの間に、雪崩、スリップとつづけて起り、最上級生4名のパーティだけに反省すべきことは多い。我々の山に対する甘さの因果応報である。以上春山合宿に関してザッとこのべたが、とにかく部員一同の深い反省が望まれる。

(記、渡部 洋)

【期 間】

66年3月11日～66年4月5日

【メンバー】

- 立山縦走隊、C.L、気象、出雲路敬孝(T3)、S.L、医療、食料、大野義照(T3)、装備、加藤佑二(T2)、記録、糸井文彦(E3)
- 薬師岳縦走隊、C.L、渡部洋(S2)、S.L、医療、黒田治朗、装備、甲田寿男(S3)、田中喜樹(T1)、食料、の場幹史(E1) 甲田吉彦(E1)、山田靖則(T1)

【行動概要】

3月10日

夜、先発隊(出雲路、甲田(寿)、山田)大阪発

3月11日 晴

バスは枋尾止り、宝温泉までトラック、新穂高から発電所取水口で設置(7時)

3月12日 晴

ワサビ平へ行く。後山田をT、Kに残して出雲路、田中寿2名鏡平へ偵察、帰幕4時

3月13日 晴

先発3名で弓折の下まで往復
夜本隊大阪発

3月14日 晴

新穂高(7:45~8:40)→ワサビ平(11:00)

トラックで新穂高から左俣谷を少し入ったところまでいく。ワサビ平より迎えにきた3名とともに10名でワサビ平へ。のち渡部、大野、出雲路は鏡平への尾根の取付まで偵察、甲田寿以外の6名で新穂高へ残した荷物をとりにいく。

3月15日 曇

出発(6:25)→尾根末端(8:05)→ワサビ平(9:45)
全員で取付までポッカ、その後、渡部、甲田寿、甲田吉、はそのまま尾根を登って2300mの三角点まで偵察、黒田入山する。

3月16日 雨後雪、停滞

3月17日 雪

出発(5:10)→尾根末端(7:00~7:30)→鏡平(13:10)
全員11名で鏡平へ入る。デボ一部残す。

3月18日 晴

出発(6:30)→尾根末端(7:30)→鏡平(12:15~45)→弓折(13:50~14:00)→鏡平(14:25)

午前中、渡部、加藤の2名は弓折迄の偵察、出雲路以下8名は山田をT、Kに残して末端のデボを回収、その後山田を除く10名にて弓折までポッカ。

3月19日 風雪、停滞

3月20日 " "

3月21日 雪後晴

3時頃になって晴れる。全員で弓折ぐらゐまでラッセルしてトレースをつける。

3月22日 曇後風雪

出発(6:45)→弓折(8:00)→双六小屋(10:30)

高気圧は夜中に通過、朝は曇天、鏡平より双六へむかうが、強い南風とガスで時間がかかることおびたしい。

3月23日 曇後雪

出発(7:15)→弓折(8:20~8:50)→双六小屋(10:15)→双六ピーク(12:00)→双六小屋(12:30)糸井、田中、山田の

3名小屋に残り、8名で弓折のテボを回収しに行く。双六小屋にもどり、山田を加えて9名で三俣連華へテボをしにいったが双六のピークより引き返す。

3月24日 晴後風雪

出発(7:15) - 三俣小屋(10:15)

晴とはいふものの、雲の流れがはやく、風が強かった。時々晴れ間がのぞくのみで、好天といふに難い。双六小屋より三俣小屋へと向かう。トラバースするルートをとったが、途中1ヶ所でfixを要する。三俣小屋に入った後、加藤、甲田吉、的場以外の8名で昨日の双六ピークにあるテボ回収に向かったが、強風のため引き返す。渡部、糸井、黒田の3名のみ三俣のピークまで行ったが、強風にあおられて退散する。

3月25日 風雪、停滞

気圧配置は冬型となり、終日風雪やまず。

3月26日 風雪後快晴

出発(10:25) - 双六(11:35 ~ 12:15) - 三俣連華(13:05) - 黒部乗越(14:05 ~ 14:25) - 三俣連華(15:45) - 小屋(16:10)

早朝は風雪であったが、9時頃より風は相変わらず猛烈であったが、晴れた。

強風を警戒して新人4名を小屋に残して、上級生7名で双六のテボを回収し、黒部乗越まで行く。黒部乗越からの帰り、夕日に輝やく薬師が美しかった。

3月27日 晴

出発(6:30) - 三俣(7:15) - 黒部乗越(8:15 ~ 9:25) - 黒部五郎(12:00) - 中俣乗越(13:30)

剣隊は3時頃黒部乗越に帰營。

高気圧が次から次へと出てきて、好天が続きそうだ。全員でいよいよ縦走に出発。剣縦走の4名は黒部乗越に荷物をおいて、テボかたがた新人パーティのサポートをする。黒部五郎を下ったところで新人パーティと別れ剣隊は黒部乗越へ戻る。新人隊は中俣乗越まで行ってテントを張る。

3月28日 快晴後曇

・新人、出発(6:45) - 上ノ岳(8:15) - 太郎小屋(10:25) - 中俣乗越から太郎まで、太郎小屋前に雪洞を掘り宿泊。

・剣、出発(6:05) - 黒部五郎(8:05) - 中俣乗越(9:20) - 上ノ岳(11:00) - 太郎小屋(12:20 ~ 12:50) - テント地(14:30)

黒部乗越から黒部五郎までは、昨日のトレースがあり早かった。中俣乗越か

ら、新人隊のラッセルに助けられて太郎小屋に行く。時間が早いので更に進むべく、新人連中の激励をうけて出発、薬師峠から1時間半行ってテントを張る。

3月29日 曇後風雪

・新人隊、停滞

・剣隊、出発(5:00)→テント地(6:00)

テントをたたんで出発したが、1時間行った所でガスでルートが判然とせずツエルをかぶって天気待ちをしたが、良くならず、やむをえずテントを張る。

3月30日 風雪、停滞

3月31日 晴後雪

・新人隊、出発(6:45)→薬師岳(9:45~10:05)→太郎小屋(11:45)

全員で薬師岳往復、ああーこれが薬師岳か。

・剣隊、出発(5:00)→薬師(6:00)→スゴ小屋(11:30)→越中沢(14:10)→テント地(14:35)

好天を予想して、暗い内に出発、富山の灯が印象的だった。富山の灯の見えるところ迄来たんだと……。スゴ乗越の辺はラッセル深し、スゴから越中沢にかけては非常に体力消耗するところだ。越中沢は傾斜の急なところが一ヶ

所あった。越中沢を下るあたりにテントを張る。

4月1日 風雪、どちらも停滞

4月2日 晴

・新人隊、出発(7:25)→折立(11:20)→有峯(13:30)→ダムサイト(14:30)→島(16:30)

いよいよ今日は下界へ下る日となったか。今日が最後の山中、明日は都会へ出てしまうだろう。

・剣隊、出発(6:10)→鳶山(7:45)→ザラ峠(8:45)→獅子岳(10:15)→獅子、鬼のゴル(10:30)→雪崩にあい(10:45)

2時に起きたら風雪、次に5時に起きたら雪はやんで後立山が見え、快晴となっていた。今日は剣御前小屋まで行かんものと張り切って出発、鳶まで行けば眼下に五色が広がり、振り返れば薬師が雄大だ。五色は案外もぐらず、アイゼンでひざよりも下位であった。ザラ峠からは足のひきつるような急斜面、獅子の稜線へ出た途端に、強風に吹かれる。獅子を無事通過して、鬼をトラバースしている時雪崩にあい、約70m流されピッケル1本を失う。仕方なく近くにテントを張り、夕方日のかげるのを待ってピッケルをなんとか

さがす。

4月3日 快晴

・新人隊、出発(9:00)→大多和峠(11:50)→大多和峠(13:45)→佐古(14:30)→土(15:40)

小見への道は雪崩の危険があるので、土へ下りることにする。大多和峠迄くるぶし位までもぐった。この日のうちに高山へ出る。春山合宿も終わった。剣隊はどうしているかなあーと思いつつも、家が恋しそうな一年生の顔又顔であった。

・剣隊、出発(13:45)→鬼(14:15)→鬼、竜王の丸(14:25)→一ノ越(15:10~15:25)→テント地(17:00)

テントをゆるがす強風に出発していたが、昼頃になって風もおさまりかけたので出発する。昨日雪崩れた所は、すでに雪も落ちついていたのでおそるおそる通過する。懸念していた竜王の登りも難なく通過し、一ノ越へ着く。小休ののち、雄山へと目の前の急斜面を登り2ピッチで登り切った。雄山神社の大きな社に驚く。春は入場無料。雄山頂上のホコラを巻くところは傾斜もきつく恐ろしい所だ。立山稜線は氷の斜面となっており、大汝と富士の折立の中間で一名がスリップ、そのはずみ

でさらに一名がスリップした。幸いに二人とも事なきを得たが、ピッケルのシャフトが折れたので、とりあえずすぐテントを張る。この後の行動について相談した結果、剣へのアタックは断念し、一ノ越を経て下山することにする。

4月4日 雪、停滞

風は弱い、雪がふりつもってテント半分位うめられ不自由な生活をする。

4月5日 快晴

出発(7:00)→一ノ越(9:00)→彌陀ヶ原ホテル(11:30~12:00)→美女平(15:00)

テントを掘り出すのに手間どった後出発。一ノ越まで慎重に行く。一ノ越からはスキーヤーがいるので、もう下界に下りたような気分になる。いきな恰好の中を、みずほらしいのがワッパでボソボソもぐって歩く途中を、スイスイとスキーでぬいていく。せっかくのゲレンデに穴をあけるのに気がひける。ホテルからは雪上車が入っており、そのトレースを歩いたので早かった。美女平までおりれば下界はまさに春らんまんの候。春がすみにかすむ富山を眺めながら無事下山したことを喜びあった。

春山合宿行動表

	新穂高	ワサビ平	鏡平	弓折	双六小屋	三蓮華小屋	黒部乗越	中俣乗越	薬師岳
3.11	出	甲山							
先		出甲							
12		山田							
発									
13		3							
14	出発3	渡出大							
	7	糸加新入1							
15		9							
	加大田								
16	黒田	渡甲甲							
17	停滞								
		7							
18		8							
		渡加							
		山田		10					
19		停滞							
20		停滞							
21									
22				11	双六				
23				8	田糸山				
					田糸以外の9名				
24					11	8			
						加的			

三俣 蓮華小屋 黒部乗越 中俣乗越 太郎小屋 薬師岳 越中沢岳 五色 一ノ越 大汝山

25	停滞							
	双六 7 ← 7							
26	← 新人4名							
27			渡黒 出加	甲新4 大糸				
28								
29		新停滞						
30		停滞		停滞				
31								
1			停滞	有峰湖	停滞			
2								
3						土富山		
4						千寿原		停滞
5						富山		

< 食料反省 >

食料係をやることになったのだが、初めは何をどれだけ買えばいいのかもわからなかったし、値段も全く不明であった。僕と竹林と要領の悪いのが2人集まって連絡の悪い事もあって、仲々計画が進まない。

一応、朝はラーメン、夕方はメリケンコ団子が中心として、ラーメンにはマルタイラーメン、ワンタンメン、焼そばを主として用いた。新らしいものとして、水を多く使うので停滞用とした干うどんは好評であった。普通のラーメンを油であげて使用したものは全員の悪評を呼び、黒部乗越でアイゼ

ンで踏みつぶされてあわれ最後となった。停滞の日の昼に、ホットケーキはうまかったが、時間と手間がかかって腹がふくれるより減の方が早かった。

食料係の最も重要な仕事は、行動中の食料の現在量の内容と数量を確実に知っておくことである。出発前に必要量を計算し買い整えるのは、ほんの一部の仕事に過ぎない。どの食料カンに現在、何がどれだけ入っているか？は正確に記録して毎日書き変えて行くことをしなかった為に、テボのカンに食料が何食あるのか、わからなくなってしまった僕の失敗は、本当にはずかしいことだ。

昼食のレーズンクラッカー2008は味もよく、今後使用を勧める。(的場記)

装 備 報 告 (' 6 5 年 春 山 合 宿)

各々の装備についてまとめてみるとー

- | | |
|-------------------|------------------------------------|
| 1. テント | 2.25Kg/man (2人使用) |
| ビニロントント2号(13.1Kg) | ビニロントントは生地丈夫さ通気性、雨に対して最もすぐれている |
| 2.2Kg/man (6人使用) | 反面テロン、ナイロンに比してかさばり重量があるという欠点を持つ。 |
| テロントント1号(Kg) | 特に氷が付着しやすく又水を含み易い。G.SをV.O混紡の薄手のものに |
| / man (5人使用) | に変えるのも一方法だろう。冬テ |
| テロントント2号(Kg) | |
| / man (7人使用) | |
| マカルー(ナイロン)(4.5Kg) | |

ントのG.S は薄手でもよい。ペグ（竹製）のかさと重さも無視出来ない。理想的にはジュラルミンとすべきだろう。

又テントとブロックについて一強風のあるときブロックがあれば確かにテント内の居住性はよくなるが、雪を伴った風の場合は吹きだまりとなり、ラッセルの必要を生じる。ブロックに風穴をあけるのも効果があるかも知れない。しかしいったい防風の為にブロックは役に立つのだろうか。テントが古くて不安ならばともかく、普通の丈夫さのテントならばかなりの風に耐えるのではなからうか。又ブロックを積む労力も無視出来ない。不必要なものの為に労力を使うのはバカげている。

2. Radius ケロ ポリタン コップフェル

ラジウスの重さは1.23Kg（もっと軽くするにはスパナを変える以外にない）又消耗品であるジョーゴ、穴そうじはHome madeにしなければならない。「ラジウスはいたまぬもの」実際今までのところそうであった。しかし、もし故障した場合のことを考えるとぞっとする。

ケロの消費量は157CC/man×day 160CCで計算すれば充分だ

が節約すれば145CCぐらいでゆけるだろう。今まで0.7ℓ/me tentで計算していたが、あまりにも大き過ぎる。

コップフェルは五人以上のテントでは小さすぎるので今後大きなポールに変える。

3. ナイロンmain サイル Fix サイル

Fix としてクレモ7mm 400mをもって行った。強度は従来のマニラ8mm より少し強い程度。手元がすべりやすいことと、かなりのびることが欠点であった。

K-7 28g/m (破断力)

(400m 123.2Kg) 580K

M-8 45g/m

540K

4. ツェルト

数が不足した。積雪期の行動ではツェルト・ラジウス・ザイル・ラジオ・天気図は必要。これにスコップがあれば万全。ツェルトは大きいめが有効だ。夏には軽テントとして使用可のもの。

5. スコップ・ノコギリ

スコップ 1.75Kg one tent
ごとに1本は要るが、どうも重すぎる。しかし小型は不可。なんとか軽くしたいものだが、登山用の雪スコ

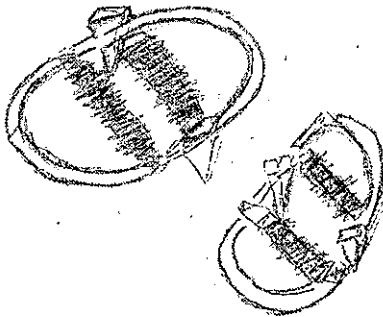
ップは軽い弱くて不可。ノコギリも必要。刃があらく握りの短いものがよい。

6. 赤旗

赤旗に細ひもを縫いつけてしっかり竹竿にくくりつけねばならない。ゴムバンドでとめたのは失敗だ。又竹竿が細かったのも失敗。

7. トランシーバ

もっと数が欲しかったが、今後は新人合宿以外は不用だろう。何故ならばPolarはもうしないだろうから。全重量は約1.90Kgで丁度10Kg/man確かに重すぎる。縦走型式に移るときこの装備重量への無神経さが憂慮される。10Kg中ケロが4.4Kg。(加藤記)



1965年度

自由山行記録

{4/27~5/5}

◎西穂高~奥穂~新穂高

{メンバー} 畑中(L)、渡部、糸井、横尾OB

4/27、晴、上高地-西穂山荘-T、S

4/28、曇、出発-西穂-間ノ岳-天狗のユル-コブ尾根の頭

4/29、雪、停滞

4/30、曇、偵察の後出発-奥穂-白出乗越-濁沢岳-濁沢槍T、S-
fix工作後帰幕

5/1、快晴、出発-北穂-大キレット-南岳-南岳、中岳のユルT、S

5/2、晴、出発-飛騨乗越-新穂高

{4/29~5/6}

◎ハツ峰-峰東面~剣完登

{メンバー} 大笹(L)、細川、黒田、牧野OB

4/28、"ちくま"にて出発

4/29、雪後雨、大町-扇沢-ダムサイト-内蔵ノ助平

4/30、小雪、出発-はしご段乗越-
一剣沢出合-三ノ沢対岸の台地

5/1、晴、B、C出発-三ノ沢-三稜-I峰-I、IIのユル-B、C

5/2、快晴、B、C-三稜-I峰-II峰-III峰-IV峰-V峰-VI峰-VII峰-VII、VIIIのユル-頭-池ノ谷乗越-
一本峰-長次郎のユル-B、C

5/3、雨風雪、停滞

5/4、雪、停滞

5/5、快晴、出発-一剣御前-彌陀ヶ原-美女平-富山

{4/28~5/5}

◎一剣-黒部別山-黒四ダム

{メンバー} 石浜(L)、栗原、出雲路、甲田、三好

4/28、大阪出発

4/29、雪、富山-伊折-馬場島

4/30、ガス、馬場島-早月尾根-
2600m地点

5/1、晴、2600m-一剣頂上-長次郎右股-一剣沢-ハシゴ段乗越-黒部別山中央峰

5/2、晴後曇、中央峰-北峰-別山-沢右股-黒部川出合-右股-北峰-中央峰

中央峰—南峰往復

5/3、雪、停滞

5/4 ガス後晴、中央峰—内蔵ノ助
—内蔵ノ助谷—黒四ダム—大町

[4/29~5/12]

◎大峰新人山行

[メンバー] 辻、大野、加藤、宮崎、
甲田、岡田、田中、山田、竹林

4/29、雨、下市口—(バス)川合
—熊渡—白川八丁—T、S

4/30、晴、T、S—双門関—狼平
—彌山T、S

5/1、晴、八経ヶ岳—明星ヶ岳—
面山分枝—シャカ岳—帰幕

5/2、晴後雨、七面山—舟の川—湯
ノ又—五条

(大野、宮崎、新人)(辻、加藤)

七面山分枝点—舟の川—湯ノ又—舟
の川入谷—ツエ谷—小屋ガケ

5/3、雨、小屋ガケ—入谷渡渉—篠
原

[4/28~5/2]

◎黒四—劔

[メンバー] 原、佐々木

4/28、雪、黒四ダム—2681m
尾根の1700m付近から御前谷—
2281独標下

4/29、雪、2281—上のコル

4/30、ガス、B、O—富士の折立

—内蔵ノ助小屋—内蔵ノ助谷—B、O

5/1、晴、B、O—内蔵ノ助カール
—劔御前—三田平

5/2、晴、T、S—彌陀ヶ原—上ノ
平

[9/7~9/8]

◎神童子谷

[メンバー] 大笹、田中、甲田、牧野
O B

9/7、晴、川合—ダムサイト—布引
谷出合—弓代谷—狼横手—沢又

9/8、晴、ハツツイ山—じょれんの
滝—山土辻—五番関—上千本

[9/5~9/6]

◎比良山

[メンバー] 三好、竹林、山田、大川
O B

9/5、晴、比良—正面谷—正面小屋
—T、S

9/6、雨、T、S—正面谷—堂満岳
南尾根の沢—堂満岳—木戸峠—打見
山—近江木戸

[10/12~10/19]

◎南アルプス(北部)縦走

[メンバー] 大野(L)、藤井、田中、
的場、山田

10/12、晴、穴山橋-平川峠
-御座石

10/13、晴後曇、御座石-ツバク
ラ頭-鳳凰小屋-地藏岳-白鳳峠-
T.S

10/14、雨、T.S-広河原-白
根御池小屋

10/15、快晴風強し、T.S-北
岳肩-北岳-間ノ岳-三峰岳-野呂
川

10/16、晴、出発-両俣小屋-出
合-北沢小屋

10/17、晴、北沢小屋-仙丈 北
沢小屋-甲斐駒-六合目

10/18、雨、出発-第二高原-赤
河原-出合-戸台

◎白馬公開登山 細川、藤井、甲田

[10/8~10/13]

◎別山南尾根

[メンバー] 加藤(L)、渡部、甲田、
竹林

10/8、晴、大町-タム-内蔵ノ
助沢出合

10/9、曇、南尾根P3、P4のコ
ル

10/10、晴、南尾根P3、P4の
コル

10/11、晴、南尾根P6

10/12、晴、休養

10/13、曇、内蔵ノ助-十字峠-
黒部

[10/31~11/1]

◎槍-常念-徳本峠

[メンバー] 糸井(L)、藤井、甲田
(1)、中村OB

10/31、雨、高山-新穂高-柳谷
小屋-

11/1、曇、柳谷小屋-槍平-飛騨
乗越-肩

11/2、ガス後晴、停滞、槍穂先へ
往復

11/3、ガス風強し、停滞

11/4、快晴、肩-天上沢乗越-西
岳小屋-大天井岳-常念小屋T.S

11/5、雨後雪、停滞

11/6、快晴、T.S-常念-蝶ヶ
岳-大滝-徳沢-白沢出合

11/7、曇、出合-徳本峠-留小
屋-島々

[10/31~11/4]

◎北鎌尾根(多門治尾根~独標)

[メンバー] 大野、三好

10/31、雨、葛温泉-湯俣

11/1、晴、湯俣-千天出合-多門
治尾根-P2-P3-P4 T.S

11/2、晴、風強し、P4→P5→
P6→独標

11/3、風雪後晴、P4-多門治尾
根-天上沢-日大小屋

11/4、晴、日大小屋-天上乗越-
槍沢小屋-上高地

[10/31~11/4]

◎北鎌尾根(日大尾根-独標)

[メンバー] 渡部、佐々木

10/31、雨、葛温泉-湯俣

11/1、晴、湯俣-千天出合-千天
沢-日大小屋

11/2、晴、日大小屋-日大尾根-
独標-北鎌沢-日大小屋

11/3、風雪後晴、停滞

11/4、日大小屋-天上乗越-槍沢
小屋-上高地

[11/3~11/6]

◎中央山稜

[メンバー] 畑中、大笹

11/3、雪、室堂-内蔵ノ助山荘

11/4、晴、中央山稜上部トレース

11/5、雨後雪、停滞

11/6、晴、内蔵ノ助山荘-内蔵ノ
助平-黒四ダム

[10/30~11/5]

◎雷鳥~黒四ダム

[メンバー] 原、石浜、黒田、出雲路、
大川OB

10/31、美女平-劔御前

11/1、劔往復

11/2、風雪、劔御前-大汝避難小
屋

11/3、晴、大汝-2681m尾根
-ダムサイト

11/4、雨、停滞

11/5、晴、丸山南尾根を見学、後
大町へ

[10/31~11/3]

◎新穂高~有峰

[メンバー] 辻、加藤、的場、甲田、
竹林

10/31、雨、新穂高-大ノマ乗越

11/1、晴、大ノマ乗越-双六-三
俣

11/2、晴、三俣-黒五 カール-
太郎

11/3、雪、太郎-有峰

1965年度個人山行

- I 八つ峰—峰東面より劔
- II 劔—黒部別山→別山沢右股—黒四ダム
- III 夏山縦走、清水谷溯行

<5月山行>

八つ峰—峰東面より劔

〔期 間〕

4月29日～5月6日

〔メンバー〕

- L 大笹秀一 (T4)
- 細川明彦 (T2)
- 黒田治朗 (M3)
- 牧野大輔 (OB)

4月28日

21時30分発ちくま、スキー客、登山客で混んでいる。急行は何だか乗りにくい感じだ。

4月29日 ☉→☉

目がさめると雨だ。大町についたのが7.00まだ雨がふっている。皆雨空をながめてうらめしげな顔をする。扇沢の手前で雨が雪に変わった。回りは一面に白かった。トンネルのトロリーバスにはぶつぶつ(料金が高いこと)いいながら乗り込む。トンネルを出るとまた雨に変わっていた。雨の中を黒部に

下っていく。側壁からの雪崩が気味悪い。1時間半で内蔵ノ助の出合、対岸には3.4張のテントがあった。タテガジンでもやる気かな。黒部も殆んど雪がつかまっていたが内蔵ノ助谷も雪に埋もれ、所々口を開けているにすぎない。雪崩に注意しながら沿にそって谷を登る。神戸大(後でわかったのだが)もダムから道連だった。依然と雨の降る中を内蔵ノ助平に着く。はしご段よりの所でドン 14.50

大町7.30—8.20 扇沢8.30—8.45 ダムサイト、休9.30—11.00 内蔵ノ助谷出合—14.50 内蔵ノ助平 4月30日、小☉

小雪のちらつく中を出発。大笹、細川のスキー組は早速スキーをつけるがワッパの方が速そう。はしご段では偵察を行うため黒部別山へ登るが天候回復せず、取りやめ、はしご段沢も横からスベリ台が幾本も入りびくびくしながら下る。デブリの後に木がへしおれ

ている。劔沢へはすぐついた。三ノ沢対岸に、絶対安全な所を見つけてドン。テブりは方々出ており、三ノ沢のテブりは他を圧していた。明日は好天気の手報に早く寝る。

偵察の箇所で大部もめたが、結局、三ノ沢、三稜、四ノ沢を見ることにし大笹、黒田は三ノ沢を見、牧野、細川は長次郎より1.2のゴルに上り、1峰に出上より三稜を見ることにする。

出発8.40-11.00はしご段のゴル-11.45劔沢出合-14.00三ノ沢対岸の台地

5月1日 ○

まだ真暗の星空の元をヘッドランプをつけて出発、雪はかたくクラストしている。

テブり上を階段登りよろしく高度を上げる。30分もすると、明るみ5時には夜が明けてしまった。1時間で、4,500m上り状態の良さに驚く。見上げると真前には三ノ沢の本流がつき上げ、左に入っているルンゼは一峰からマイナーに出ている尾根へつき上げている。もう少し上部に右につき上げ三稜に達するルンゼがあり、始めはどれでも行けそうに見えたが、上るにつれて、左、真中は急そうなのがわかり右のルンゼをとる。50度に達するかという急傾斜をアイゼンをきしませ、

三稜にでる。そこは三稜上部の円いならかな尾根だった。下部をのぞくと、雪を落した岩稜が右に左に曲り、とても行けそうもない。これから三稜を使って容易に上に出られそうだ。4の沢も、3の沢とよく似たものだろう。むしろ傾斜もなだらかかもしれない。マイナーへの尾根は岩峰がでており、むしろ、黒部別山が指呼の間にあり、後立の稜線もま近にせまり、まだたっぷり例年の3月の雪をつけている。改めて今年の雪の多さを知らされる。一峰手前の隆起よりナイフリッジが始まった。慎重に綱渡りよろしく渡る。一峰に着いたのが8.00。偵察を混ぜて4時間で950m程登ってしまったのだ。最も懸念されていた所だけに上首尾によろこぶ。1.2のゴルから登ってきた牧野、細川が2峰で待っていた。一峰の下りは長次郎側岩、三ノ窓側雪で急そうだ。早速ザイルを出し下る。雪と岩の間、もしくは三ノ窓側の雪稜を簡単に下る。危なっかしい雪稜を通り二峰につく、もう彼らも用がないので、2.3のゴルまで見に行って下ることにする。二峰の下りは長次郎側をザイルを出し、キックステップで下る。2.3のゴルにすれば今日のアルパイトは終りと下り始める。まだ9.30下るにはおしい時間だが、疲れもあるし、

必要もないだろう。テントについては11.20昼食、2時ごろ別山沢のパーティが通りかかり、しばし雑談、彼ら今日別山まで頑張るそう。

B.0 出発4.05 - 三ノ沢 - 6.00
三稜に取り付き - 8.00 - 峰 - 8.30
1.2のコル0.50 休 - 9.30 下りか
け - 11.20 テント

5月2日 ○時々薄曇 Attack

昨日の天気図より晴天を期していたので、1時前起床、早起きはつらい。Essenをすませて出発は3時を少し出ただけで、星空がまばゆい。昨日通り三ノ沢をばかすか飛ばす、前日より少し下から三稜に取り付く、I峰についたのが6.00。約る時間快調、まだ陽が照り始めた所なので寒い。薄曇がたなびき、悪くはなりそうにもない。牧野さんが不調をもらすので、パーティの組合を大笹、牧野と細川、黒田とし、ここからザイルをつける。I峰の下りとII峰は昨日通り、III峰は長次郎側に切れかかり、危なっかしそうに見えたが、コンテで簡単に通過。IV峰、V峰と慎重に通ってきたので一服。ここでEssenとする。そうしている中に1.2のコルより登って僕らの後から来ていた神戸岳窓会のおっさん2人が先に下り始める。どこから下るかを見ると、長次郎側にまきぎみに下って

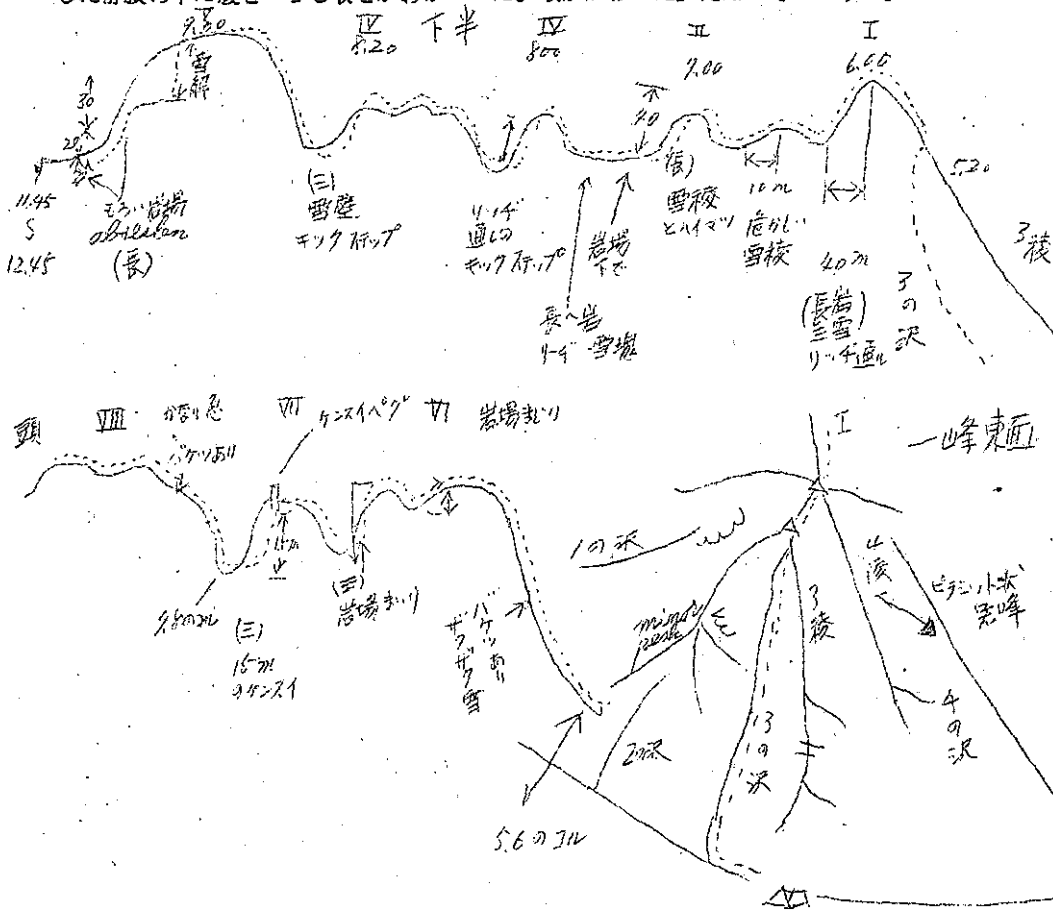
行った。始めからリッジ通しは高巨60m位あり、とてもむりで、僕らもついでゆくことにする。下り始めは雪面を真直ぐ下り、岩場に向って10m位の70度ぐらゐの雪面のtraverse。前がステップを掘ってくれたので、まあ楽に行けたが気味悪い感じ。岩場からもろい岩角を使つての20mのけんすい。更に神戸岳窓会が打ったボルトを使つての15mのabseilenしてコルから長次郎側少しの所にでる。この下り前もつかえたりpinを探したりしてかなりもたつき、下り始めが10時ごろで4人5.6のコルに降り立ったのが1時15分前。ここで牧野さんが下りるといふのでこれから上はる人だ。小EssenをすましVI峰の登りにかかる。10時ごろから雪の状態悪くなっていたが、今は最悪、この5.6のコルからは6~7人が先に登っており、バケツがあったが、その大きなバケツも時々抜けヒヤリヒヤリとしながら登る。VII峰の下りでケンスイヴグ登場。前のパーティの氷きのこの後があったが、雪柔らかくなりバグをうちこむ。根元迄がっちり食いこみ、びくともしない。快適な15mのケイスイ。

VII、VIIIのコルまでくれば、眼下の長次郎もせまり高度感も余り感じられない。雪もしまつてきて急なVIII峰の登り

もバケツに助けられて、すぐ頭へ。ここで剣の西面が現れる。剣、小窓、赤谷尾根が目飛びこむ。赤谷尾根はまだ4月始めの状態じやないか。ハツ峰の緊張の連続で、ここから本峰までは散歩気分、長次郎のコル、本峰わきには、テントが並んでいる。本峰16.20曇っているためか薄暗かった。しんとした静寂の中に腹をへらし喉をかわか

しる人は放心したように坐っていた。それから景色を見回す360°さえぎるものはなかった。西には早月があり、向こうに彌陀ヶ原が横たわっていた。

下りは早かった。しまった雪の上をアイゼンでかけ下った。6.00テント。牧野さんが、もう帰ってきたのかというような顔で首を出す。あゝ腹がへった。喉がかわいた。ただ一それだけ。



5月3日 ⊗風雪強し ドン
前日の猛アルバイトのため喜んで停滯

5月4日 ⊗ → ⊙
昼ごろから晴れ間見え始め、雪崩見物。だれがかぼれ落ちたと云うと、皆一せいにテントから首をだす。「すごいなあ」これもなれてしまうと、何とも感じなくなる。降雪後なので動けず雪の落ち着く夜間に行動しようということになる。殆んどねられず、23時より Essen 開始。

5月5日
出発2.00、満天の星空の元、冷気に満ちた空気の中にとけこんで行く。夜明けに移る時の自然の変化をうっとりとしてながめる。劔沢は広大だった。その横にそびえる源治郎がそれに輪をかけた。

劔御前についたのは6時半ごろ。4時間以上の登りは、なまった体にえらかった。スキー組の2人ははりきったが、まさか雷鳥沢をSackを背負って下るわけにもいかない。スキー客が次から次へと劔御前へ登って行く。その間をくり制動。雷鳥から登って見たが原でここからスキー組と徒歩組に分れる。徒歩組天狗で30分、彌陀ヶ原山荘前で4~50分待たされる。「やっぱり歩くのは早いね」

バスは上ノ小平までなので、そこから1時間以上歩く。夏は、うんうんと登るところも雪がつけば早く下れる。

90円 170円
上ノ小平——美女平——千寿ヶ原
150円
富山

計 410円 高い!!
⇒中さん(ビール、トンカツ)

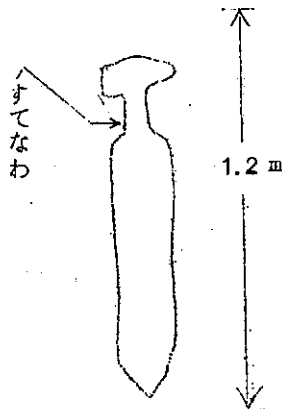
どうやら遭難せずに帰れた 乾杯
うまい!!

装 備

ザイル(40m).....2本
V2(内張なし)、ペグ、ポール
すてなわ.....20m
トンカチ.....3本
ハーケン.....横7本、縦5本
フェルト.....1
その他もろもろ

変った点

ケンスイバグ.....2本



後がき

成功の原因

- 1) 偵察、アタックと2日快が続いた。
- 2) 雪の状態がよかったこと。
 - 3の沢アイゼンをきかせて飛ばせた。ナイフリッジもしまっているときは容易
 - 岩場の露出が少なかった。

- 3) Keep early hours したこと。これは、しまっている中にV峰までつけた。
- 4) 皆の気持ちを引張っていったリーダーの統率力
- 5) ケンスイバグ(これは絶対に必要ではないが、あった方がよかった)。

<5月山行>

劔一黒部別山一黒四ダム

[年月日]

1965年4月28~5月5日

[メンバー]

石浜(L)、栗原、出雲路、甲田、三好

[コース]

- 4月28日 大阪出発
- 29日 富山一伊折一馬場島
- 30日 馬場島一早月尾根一2600m地点
- 5月1日 2600m一劔頂上一長次郎右股一劔沢一ハシゴ谷一乗越一黒部別山中央峰
- 2日 (石浜、出雲路)別山沢往復 (栗原、甲田、三好)

南峰往復

- 3日 停滯
- 4日 黒部別山一乗越一内蔵ノ助平一黒部川一黒四ダム一扇沢一杉本
- 5日 大阪帰着

4月29日

5時過富山着、シトシトと雨が降っていた。伊折の手前にある橋が改修中で、バスはそこでストップ。中村与次郎氏のトラックで馬場島まで入った。相変らず雨はやまず、今日は馬場島山荘に泊まることに決定。トラック代と小遣代をあわせて400円の余分な出費だった。

4月30日

3時半起床、6時5分出発、雪の量は春とちっとも変わっていない様だった。

1ピッチで松尾平の端に着いた。一面のガスでまわりの景色は全然見えない。そのうちに先行したベルコナや金沢大のパーティに追いついた。先頭パーティがラッセルに苦しんでいるのかスピードが遅い。ピッチの違いでいつの間にか先頭になった。深い雪で3人がワカンをつけて交代でラッセル。9時昼メシ、2.30人が我々を追い越していった。ずい分早月に入ったものだ。

10時過ぎガスが晴れて、毛勝から大日まで綺麗に見えた。毛勝も大日もまだ真白だった。まもなく雲海の次の波が押しよせてきて、再びガスに包まれた。1900m地点には避難小屋があると聞いたが、まだ雪の下にあるのか確認できなかった。

やがて森林限界をこえ、尾根がやせてきた。2600m地点の近いことがわかった。東大谷側は岩崖になってきた。5時半によいテント場が見つかったのでリュックをおろした。

テントを張ってシュラフを広げるとゆっくりくつろいだ気分になった。いつのまにかガスが消え、劔本峰が夕焼けに輝いていた。小窓尾根と劔尾根が重なって見える。雪はほとんどついてない。「劔岳」をだしてきて、あれが〇〇壁、これが△△ルンゼと、ひとしきり本物と根元念図を見比べた。が

名前は少しも覚えられなかった。

5月1日

3時起床、6時5分出発、快晴、まもなく急なやせ尾根にかかった。日が昇るとすぐに雪がゆるみ、ステップを切るのは簡単だが、フィックスが残っているのを見ても、春期や冬期には早月尾根では難しい所だ。フィックスがなければザイルを出さねばと思う所もあった。やがて岩稜になる。のぼるに従って別山尾根から劔沢上部の方が右手に見えてきた。別山尾根からは沢山の人が劔山頂めざして登ってくる。岩のゴロゴロした所を通して別山尾根と一緒に本峰への最後の登りにかかった。ガスったら頂上から早月尾根へ下るのが難しそうだ。8時55分雪の上をたどって劔の山頂に立った。すぐ下に黒部別山が翼をひろげている。

昼メシを食べて9時半に山頂を出発。長次郎の科尔へは懸垂で降りた。リュックを別におろしたので、全部で1時間半程かかった。頂上まで来る人は多いが、更にこちらへ縦走するパーティは皆無だった。長次郎雪渓を科尔から熊の岩の横まではシリセードでおり、あとはザブリの中をテクテクと歩いて、劔沢との出合に12時半に着いた。途中八ツ峰の2.3(?)の科尔あたりから長次郎へおりにいる4人パーティを

〔食糧〕

9日分

〔装備〕

ザイル40m1、カラビナ10、
ハーケン(タテ5、ヨコ5)
トンカチ1、ステナワ5m
アブミ2、ツェルト2、
各自わらし1

〈前がき〉

京大の部報10を読み、興味をそ
られ、記録をさがすと名大が完全溯行
したとのことで、フアイトをそがれ
たが、自信をつけ細川をさそって計画
する。3人か4人Partyにしたいくて、
他の部員をさそおうが、加わりそうもな
く、2人でやるかといっていた所に横
尾さんが入ってくれ、大いに心強くな
る。皆の予想は失敗して帰って来よる
ぞということらしいので、こんちくし
ょうやってやるぞと決心する。だが兎
に角この黒部では黒瀧川に次ぐ大きな
支沢(えんえん長く、高度差2400
m)であり、数Partyしか入っていない
というのが魅力だった。

7月28日◎

鋤定着合宿も終り、二股も今日引き
払ってしまう。昨年に引きつづいた不
順を天候のため計画は壊滅寸前であっ
た。この不満を縦走で果してやろうと

張切る。食糧は房治にあげてあるので
今日はサブで1日荷物とり、出発7時
で房治についたのは11時、それから
ひまを食って二股着6時すぎ、市大に
よると、丁度今日はビパーク散歩に出
かけ、テントがあいているからという
ので、泊らせてもらう。

7月29日○

市大の方にお礼をい、7時出発、
二股を後に北又をぶらぶら登っていて
池平小屋についたところは既にかんかん
照りで、合宿中の日光を集めても余り
ある程であった。仙人池にうつる剣は
やっと来た真夏の日射の中を広大な青
天井を背景にしてどっしりとあった。
このまゝ剣とはなれてしまうのは残念
だった。腹がたった。雨の停滞をうら
んだ。がこのいきどおりも、じょじょ
に縦走の成功への決意へ変ってきた。
仙人谷はびっしり雪がつまっていた。
「暑いな、しんどいな」を連発し、休
みすぎたのが、阿層原についたのは2
時前。夕立にふられトンネルにげこ
む。後できくとトンネルからでも行け
たそう。それから水平道にやっど登
り、長い長い道を歩いた。奥鐘山の西
壁が見え、この1000mの頂上から
一気に黒部へ落ちている壁に驚異の眼
をみはった。だがこれも東の間でこの
wand は常に横にあり、えんえんと続

く、このRound 北仙人尾根をのろった。樺平に着いたのは7時をとうにまわり、谷間には星がきらきらと輝いていた。駅のBenchでドン。

7月30日

8時ごろ出発、40～50分で祖母谷温泉に着いてしまう。温泉で横尾さんをさがすがいない。まだ来てないらしい。今日中にくるだろう。脇の祖父谷との出合の河原にツェルトを張る。やっとapproach が終わったのである。後はこの祖母谷を登りさえすればいいのだ。上流にぶらぶら散歩に行く。水量を推量しようと徒渉を試みるが余程好地点をさがさねばならない。こいつは手ごわいと思う。温泉宿からすぐ上流に天然の風呂があり、素裸で飛びこむ。川原に湯がわき出、その側の流れの水でいい加減になっていた。3時ごろ夕立でツェルトに引きこんでいた所を横尾さんが現われる。肉600gのおみやげは素晴しかった。Proteinがたりないよの胃袋はがつがつしていた。晩めしはすきやきに舌つゞみを打つ。荷物を整理するとEssen 7日分、ザイル40m 1本、ハンマー1、カラビナ10、ハーケン10、ステナワ、ツェルト2、だが個人装備13kg位あるので、沢をやるには少し重そうだ。

7月31日 ©

出発7.10、温泉旅館で登山届けを出し、脇のつり橋を渡って右岸に渡る。右岸沿いの百間尾根の縦走路に続く道を25分程たどると、左手から沢が入っている。どうせこの辺りは広い河原だろうと、この沢を少し下って祖母谷本流におり立つ(8.00)。広々とした河原がつゞいており、まだ緊張感はない。空一面に雲におまわれ、不気味な感じである。

一度左岸に渡り、また渡り返しながらどんどん進むが、前には廊下らしきものが見えだんだん狭くなり、皆このゴルジュを乗りきろうとフアイトを燃す。黒田が右岸の岩に沿って進む。手がかりがないまゝに胸まできたなと思うとキスがボカッと浮き上がり流される。急流からは少し離れていたのので1～2m犬かきらしき泳法でもどる。他の2人もあきらめてザイルをだし、すぐ右岸のぬるぬるしたいかにもいやらしい岩にとりつき、その上の草つきを越した所で1ピッチ、更に1ピッチ、ブッシュのトラバースをしてテラスにつく(1時前)。まだ降られず、腹ごしらえして再びブッシュとぎして高まき(30分)、ゴルジュの終わった所に降りる。広がった河原を3度徒渉すると、また狭くなりゲートが現われる。兩岸せまり落差1～2mで滝状になっ

て、再び左岸のぬるぬるした岩を登り、すぐ沢に下りる。沢身を進んでいくとまたゲートが見え、それごとに雪溪がちらちらのぞめる。これを右岸を高まき、左手からルンゼが入っている所あたりへ15mのけんすいで下る。上着スポンがぬれて、さすがのナイロンザイルもすべらず、とても不愉快だった。すぐ本流はブッシュにおおわれ左に曲り、次いで右に折れている。左岸からは2段の滝が入り、その上にはまだ陽が照り、明るいスカイラインが見える。既に5時をまわり、このブッシュ谷は手ごわくドンにする。わずかばかりの砂地を見つけ、ぬれた体をたきびでかわかす。脳では祖母谷のセトがごうごうとうなっていた。「これは水量が多いな」「名大より大分手こずっているぞ」などといひ合いながら、これからへの不安と期待で胸がさわぐ。

8月1日

日影で寒いから、出発はゆっくりと8時。2段の滝とブッシュ谷は通れずすぐ右岸の左手から入っているガウ場を登る。30分程トラバース気味にブッシュをこいで登っていく。キスリングをがついでのブッシュこぎはしゃっばく、朝っぱらから胸くそ悪い。下をのぞいて見るが更に上手に2,3mの滝がでている。「仕方ない、おりれんな」

と再びウッシュこぎして河原に下る(9.10)。廊下状の所をへつって進むが水流にまけて、黒田、細川、相ついでにじゅぼん、全身ずぶぬれ、ザックは水を入れてかついでいるので、すこぶる重くはなるが、横尾OBはさすがにベテラン、現役2人に手をかして難場を通過する。沢は少し広くなり、ごろごろの石の上を行き、西ノ谷の出合の手前で倒木の上を渡り右岸にわたる。キスを持ってはとてもむりと、2人は空身で倒木をわたり、対岸へ渡り、狭い所で向岸からほったキスを受けるといふ作業にはとても時間をくってしまい、1時半位だったろうか。突如祖母谷の流れが黄色味がかかるや、あれよあれよという間に、黒っぽい茶の濁流に変じ、この急な流れをますます激しく不気味に見せたのだった。3人は、ただ茫然として流れを見守ったが、5分位たっても依然かわらず不安だったが、しだいに元の白い泡がほとぼしる清流を見てほっとする。雪溪の崩壊だろうということに話は落ちつき、腹ごしらえをする。この出合は赤ちゃけた岩でかなりせまい。

セトはこの辺りまでだと聞いていたのでほっとしようとしたが、これからもまだ祖母谷は僕らに息を抜かせなかった。偵察してから左岸にうつり、し

ばらく進むと、スベリ台の様な滝が出
ここでは右岸へうつる。この上にはケ
ルンがあって、それからすぐ左手を大
きく高まき、支沢の入る所でケンスイ
(15m)で下る。更に進むと眼前に
は、右岸に巨大な岩(5m位)がふさ
ぎ、この岩の左をへつって岩上に立ち、
どぼんと水にとびこむ。その後は河中
が広がり緊張はやっとほぐれ、ごろご
ろの河原をとばしやとこさ硫黄沢に
つく(5.30)、この沢全体が硫黄臭
かったが特にこの辺はきつい。既に陽
は山の端にかくれ、沢の夕やみがせま
ってきた。兎に角硫黄沢までぬけたの
だった。だがまだ清水谷が待っている
のだ。「まあ、じっくり行こうや、あ
と2日かけて清水谷越して奥の広河原
まで行ったらいいやろ」

8月2日

今日は一応清水谷にぶち当ろうと早
い目に出る(6.30)。すぐ右手から
入る硫黄沢を渡り本流の右岸に出、広
いゴロ地帯なので小滝があるが右に
左に渡渉をくりかえし、はかどる、休
(7.30)。すぐ右手から6段の滝が
入り、沢が大きく屈曲する所(8.30)
で雪溪が残っている。更に前方には雪
溪がつづいている。この下にもぐり、
どんどんゆくが出口がなく、やっとす
きまを見つけ、雪溪上にはいでる。ふ

りかえると、谷間ごとに劔がもうかな
り遠くに輝いていた。「はるけく来つ
るものかな」。

雪溪はだいたいづつづいてた。この上
をどんどん行き京大のエスケープルート
をすぎると間もなく岩小屋のあとがあ
った。ここで急に右折する。ここから
核心部であろうと偵察に出る。なる程
35mの堂々とした瀑布である。両岸
は垂直に切りたち、せいぜいポルトで
も打たなきやとつても無理だ。さて、
右をまくか、左をまくかと協議するが
右手をまく方が確実だろうと、左岸の
ガラガラのルンゼを大きく登る(100
m)。ここでまた偵察し、トラバース
気味に登って岩の上に出、ここから右
手から入っているルンゼに降り、この
ルンゼを5~60m下り、最後の下り
は10mのケンスイで沢身をおりたつ
(ハーケン2)(12.00)。どこで
高まきをしいられるのか知らんが、と
にかく行くだけだった。それからなん
となく行くと左手から60mの滝のあ
る沢が入ってくる。少し行くと、先は
どうやら滝らしいので偵察にでる。右
折すると左岸は100mに近い岩壁が
つい立ち、大きな滝が落ちていたが、
右岸の岩壁は斜上に走るBand 3の本
位あり、どうやら行けそうなのでサイ
ルをつけて下から2番目のBand にと

りつく。1ピッチ目で残置ハーケンを見つければピレーし、後はザイルを解いて滝の上にする。更にもう1本ハーケンを見つける。前方には雪溪が見え、これに登っさえれば楽だろうと、登り口をさがすがだめで、左手にあるスラブを上へ上へと登り、ここで余り登りすぎて沢に下れず、仕方なく少し下ってケンスイ2回(7m、13m)でやっとこさ雪溪上に降り立つ。もう日がかげり始めたが雪溪上ではどうにもならず、予備のエッセンを出して食い始める。ここで沢は左に大きく曲り真直ぐ2~300m雪溪がつづき、更に右に曲っている。雪溪をすぎると、鉾山の鉾石くずのような硫黄でくさい。ガウガウの岩のトラバース、高まきの連続であったが、案外はかどって、急に左折すると2~300m前に、これまでの赤茶けたのではなく、黒々とした岩壁がそびえ、そのまん中にまっ白くほどばしる水をひき、下部では扇状に開いた落ち着いた滝が見えた(これが扇の滝とかエレガントな滝といっているやつだろう)。両岸は既に開け始めた。まわりの硫黄でふしょくされた緑のつかぬ岩峰群が異様に気味悪く荒々しさをそえていたが、これまでの両岸のFelsに圧迫からのがれ、難場を越したのだ。やったのだという気持ち

満足をおぼえ、ここでツェルトを張る(6.30)。すぐ暗くなってしまったが3人の話す声も軽くなり、へとへと体をなぐさめる。

8月3日 ○→ガス→①

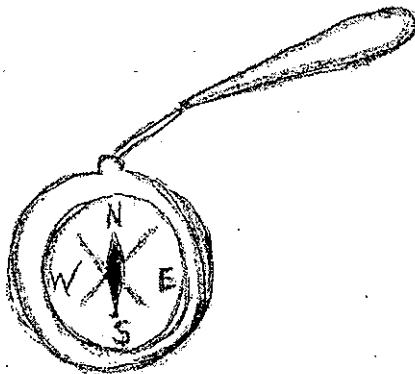
今日はいよいよ白馬に立てるのだと思うと張りきって、滝の左手の斜面を登って行く。踏跡らしきものあって少しブッシュをこいだりして沢身を行く。水量は減ったとはいえ、巾がせまくなり水勢はなかなかどうしておとろえない。最後まで苦しめる気かなく(いや、楽しませてくれているのだよ)。ピナクルが見えだしてから急に開けるとそこが奥の広河原だった(9.00)。ここには丸い丸い小さな小石でいっぱいだった。その上をさらさらと小川が流れその中をじゃぶじゃぶ進んでいった。残雪があり、草地のある砂地に座ってすぐ目の前の稜線をながめると、そこには黒い人影がはい、Callをかわし合う声がこだましていた。ここで十分休み、左手の沢に進路をとる。ここからはかなり雪がつかまっていた。白馬山荘の手前の雪田で僕は止った(10.00)。その雪がとけ、しずくとなり互いに集まりせせらぎとなり、祖母谷のセト、清水の大滝をつくっているのだった。3人は疲れた足をひきづって白馬に登って行った(11.00)。ガ

スの中で再び剣を望めなかったのはま
ことに残念だった。後はブラブラ下っ
て、レンガ温泉着4.30。

8月4日

Stent 8.00-10.20 佐度見平

バス
14.00 平岩



O. B. 寄稿

I 登山と高圧酸素手術

II 富士山の一年

登山と高圧酸素手術

恩 地 裕

高圧酸素手術室

阪大の急救外科センター（仮称）に大きな、十数人が入れる、気密の手術室を建造中です。これの目的は、高気圧（約3気圧）下で手術をすれば、酸素を平圧の空気で作るときの十数倍も与えることができるからです。主に心臓の手術や、平圧では危険で、できないような状態の悪いものに使う予定です。この手術室は大きな気密の鉄罐ですから、減圧もできるわけです。エベレストの頂上ぐらまでは減圧できますから、登山者の生理その研究、装備の研究などに使用できます。たとえば酸素呼吸器の使用の練習とか、それらの機器が低圧下で正常に働くかどうかの検査にはもってこいだと思います。

酸素欠乏と登山

酸素欠乏は単に機械を止めるだけでなくこれを破壊してしまふ。というのは有名な生理学者ホールデンの名言としてわれわれの間に伝えられております。そして、医者の間では、すべての死の直接の原因が酸素欠乏であるとして、恐れられております。しかし、登

山、とくにヒマラヤなどの高山での登山には必然的に酸素の不足がつきまといまふ。私はいつも思うのですが、エベレストでも十分な酸素があれば、容易に登れるのではないのでしょうか。極端な例をもっていえば、六甲山でも酸素が平地の $\frac{1}{4}$ であれば、なかなか登れないと思います。私共が、25年ほど前に用いていた登山技術は、今日の皆様目からすれば笑いが止らない程度のものでしょう。恐らく、今から20年すれば、エベレストも宇宙服を着て十分な酸素を呼吸しながら、いつでも登れるようになるでしょう。しかし、そうなったら、エベレストも魅力が失ってしまうかも知れません。

登山服についての私の夢

エベレストのような高い山に用いる登山家の服は、宇宙飛行士が宇宙遊泳をするときに用いるような気密服で、十分な酸素、すなわち150ミリメートル水銀柱以上の酸素圧を保つものを作ったらどうかと思います。完全な気密性を持ち、炭酸ガスは吸着させるようにすれば、そんなに大量に酸素のポ

ンベは必要ないと思うのです。宇宙船でも空気を充してあるものと、前記の圧力の酸素を充してあるものが2種類あると聞いております。

アドバンスト・キャンプについて

非常に高所に設営するアドバンスト・キャンプは、やはり宇宙船のような気密性のもので、中に酸素を充し、炭酸ガスを吸収する装置をつけるのがよいと思います。そうしないと登山家は休息をとれないと思うのです。米國およびイタリーで、400~600米の海の底で1カ月ほど暮す実験をしています。これは潜水艇でなく、周囲の水圧と平衡している、逆さに伏せた吊鐘と考えていただければよいのです。人間は自由に出入りして、深海での作業に

従事し、中に入って休養するのです。

この中では、酸素とヘリウムの混合体を用いています。酸素圧を正確にコントロールするのに相当技術的に難かしい点があると思います。

酸素欠乏のない登山

前にも申し上げたように、われわれ医者の間では、酸素欠乏はすべての死の直接の原因として、恐れられています。私共から見ると、ヒマラヤなどの登山は、高所に登るための斗いではなく、酸素不足と人体との斗いであるように思えます。人間は150ミリ水銀柱の酸素分圧の中に生きるように、運命づけられているわけですから、それを満足させるような登山の方法はないものでしょうか？



富士山の一年

玉井 康雄

サラリーマンになり、生活が規則正しくなり、飲むビールの量が増え、運動不足となると、だんだん腹に肉がついてくる。そこで山ということになるが、少ない休暇は帰省に使うことになってしまうので、自然と小田原より日帰りの可能な富士山に足が向いた。そんなわけでとうとういままでに11回も登ってしまった。富士山のことは、「1回も登らなければバカ、1回以上登るのもバカ」といわれているが、まんざらそうでもないのいろいろな気付いたことをおりませせて報告する。なおいわゆるパリエーションルートはいきたいいきたいと思っっているながら、未だにそのままになっている。(求同行者ノ)

<夏の富士>

かなり高くまでバスが行くので登るのは楽である。ただしすごい人混みの中をかきわけかきわけのぼる覚悟がいる。石をおとすと悪いのでうっかり直登もできず、じっくりかえっている人の頭など踏まぬよう、そっとすばやく登り、朝早くには降りてしまうのがよ

い。大人数で行くのには全くむかず、一度はぐれたらそれっきりになる恐れあり。下りはどのコースも砂走りになるので、靴へ小石が入るのを防ぐためにスパッツは必要である。しかし混雑をきわめるのは8月中旬くらいまでで9月になるともうウリのようになん静かになってしまう。

(記録)

- 3.8.7/27~28①(団体)須走口より頂上、宝永を経て御殿場口へ下る。
3.8.8/24~25キリ(野田氏、松方氏と)吉田口より枉復
3.8.9/22①(友人と)吉田口より頂上を経て御殿場へ

<新雪の富士>

新聞が富士に雪の来たことを報じている。南からでは雪は見えないが、北から登ると8合5勺からは夏道は雪でうまり堅くクラストしている。お鉢のへりで、さっそく滑落停止の練習など試みるが、3回くらいで息が切れてしまう。やはり富士山は高いのである。11月に入るととどんどん雪線はさがり、

連休には再び多くの人が出てきてにぎやかになる。吉田口にくらべると人は少ないが、御殿場口にもかなりのパーティーが入る。これら東南面に入るのは、空いていて、雪崩や突風の危険が少なく、又5合目から7合目の広い雪面で充分雪上訓練ができるので、むしろ吉田大沢へ行くより得策であろう。ただし御殿場口9合目(通称大タマリ)附近は傾斜が急で、とばされると宝永の火口に落ちてしまうので注意。強風の日には測候所の人ほとんりの長尾尾根につけられた「手すり」にすがって登る。なお測候所で休むとき、アイゼンをぬいで入ると、かえってあやしき登山者が来たかと思われるようである。

(記録)

38.10/13〇(友人と)吉田口
～頂上～御殿場

38.11/17〇(単独)御殿場より
頂上往復

38.11/24①(友人と)御殿場
より頂上往復。頂上は-12℃
風速20～25m、気圧650
ミリバール

<厳冬の富士>

富士山はもう真白だ。強い風にあおられて、尾根筋から青空めがけて雪煙はすさまじく吹きあがる。吉田口5合目から見ると「あたかもマナスルのごと

し」となる。しかし真冬は一番雪上訓練に適していると思われる。吉田大沢について言えば、雪はしまつて安定しており、1月2月の間の雪崩はほとんどない。沢にあった露岩は完全にかくれ安全である。風向も沢ルートでは一定している。風は8合くらいまでは吹きおろし、8合5勺附近から上は下からの吹き上げとなる。したがって下降時はこのあたりでバランスを崩さぬよう注意せねばならない。登りのルートはこのあたりからやや右にとり屏風尾根側のカール状の部分に入るとよい。大沢にくらべ夏道ルートの方が一般に安全であるといわれるが、これにはやや疑問がある。夏道が須走口登山路と合流する8合5勺附近は強い風にふかれる上に、風向が変わりやすく、このあたりでのスリップ事故はあとを絶たない。僕が登った時も夏道をえらんだパーティーは全て8合から引返してしまった。御殿場口は比較的風が弱く安全であるが、5合から7合の広い雪面を直径5mくらいの雪のタツマキがどんどん下って来るので、やはり苦しいことに変わりはない。3合より下はスキーのよいゲレンデとなる。

(記録)

38.12/15①(野田氏と)御殿場より7合5勺まで往復

4.1.1/15~16①(単独)吉田

大沢より頂上往復

<残雪の富士>

春になると麓はナノハナと新緑に塗りわけられ素晴らしいが、山の上はあまり快適でない。4月になると頂上でも雨が降ったりする。このような時は雪面はにぎりこぶしくらいの氷塊におおわれ歩きにくく且不安定になる。夜になってから破れやすいクラストに泣きながら御殿場まで下ったことがあるが、この広い斜面ではヘッドランプは全く無力であり小さい小屋などは見付らない。かかる時は1合目にある無人のE.V中継局の標識灯を目当てにまっすぐ下るのがよい。吉田大沢は暖かくなるにしたがって、泥まみれのデブリだらけになり楽しくなくなる。なお6月になっても方々に大きな雪田が残るので新人の訓練などにはいいかも知れない。

(記録)

3.9.4/5②(友人と)吉田口より

(夏道)頂上を経て御殿場へ

4.0.5/2.9キリ(笠松氏と)吉田口

(夏道)より頂上、大沢を下る。

ヒマラヤ登頂者もバテるので安心した。

3.8.6/10~11③(単独)須走所より

頂上を経て御殿場へ、交通の便

悪く3000mを登降した。

<アプローチの交通について>

スバルラインの完成は山中に非登山者を増しただけである。以前からも滝沢林道等により北面からは同じ高さまでバスが上っていた。なお積雪期にスバルラインの途中までバスが行くことがあるが、これはスキーヤーの為のものであって登山者は乗ってはならぬ。この道は北東面を大きく巻いて登るので、とんでもない所におろされて佐藤小屋へ行くのにまる一日かかったりするからである。

冬の滝沢林道はチェーンをつければ中之茶屋くらいまで楽にのぼれる。これから佐藤小屋まではゆっくりとした半日行程である。

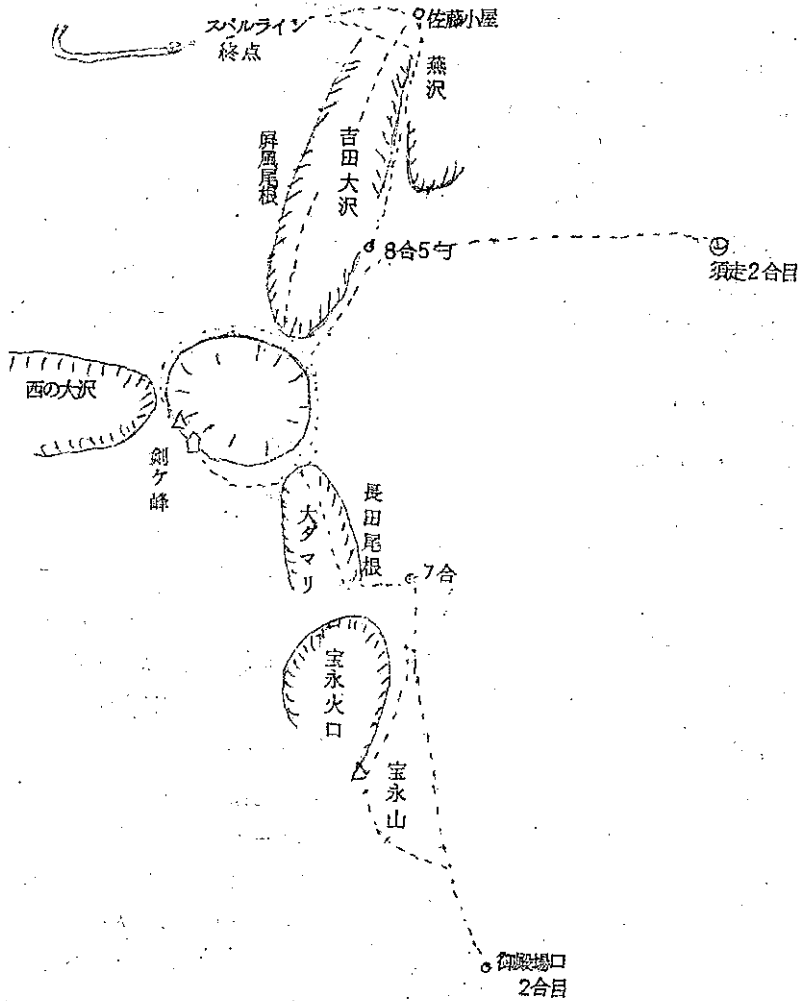
須走口・御殿場口はともにシーズン・オフになるとバスの運行は全くなくなる。普通のバス終点から頂上を往復するとなると長い山麓行進と3000mの高度差のためにかなり疲労する。

冬に東海道線で関西から来る場合には御殿場ルートを利用するのが一番時間的に早い。2千円出せば、よほど雪の多い時でなければ、6人乗りのタクシーが駅前から1合目~新2合目くらいまで運んでくれるので、その日のうちに頂上へ立つことも可能である。

東面、南面はいつでも山麓は自衛隊と米軍の演習地となっている。そのた

め「パズーカの撃ち方」などは分るよ
うになるが、戦車のあとなども多く、
夜の下りは迷いやすい。しかし明るい

うならば、地元のトラックなどをつ
かまえることが出来よう。



昭和41年度部員名簿

部長	篠田 軍治	池田市畑町1656	
	住吉 仙也	西宮市羽衣町97	Tel 西宮 3-0316
	牧野 大輔	豊中市宮山町3の94 宮山寮	Tel 豊中 52-0148
= 38年度入部 =			
渡部 洋		豊中市岡上ノ町3の71	(S2)
出雲路敬孝		神戸市灘区一王山町5の46 Tel 神戸 85-547	(T4)
佐々木義弘		西宮市甲子園町815ノ311	(S4)
大野 義照		大阪市旭区豊里町 1055の4本西久雄方	(T4)
糸井 文彦		尼崎市東園田町9丁目39の7	(E4)
加藤 佑二		大阪市南区大宝寺東之丁7番地 大宝寺ビル内	(T3)
黒田 治朗		堺市浜寺諏訪ノ森町西4丁目340 Tel 堺 6-1428	(M4)
辻 信男		大阪市東成区東今里町3の19 Tel 971-2554	(T4)
細川 明彦		豊中市桜塚東通1の14 岡本方	(T2)
= 39年度入部 =			
三好 亮		吹田市山田下2601	(T2)
甲田 寿男		茨木市駅前1丁目8の21	(S4)
= 40年度入部 =			
田中 喜樹		箕面市粟生外院4の4小路 Tel 箕面 21-8413	(T2)
甲田 吉彦		貝塚市水間482 Tel 水間 178	(Σ2)
岡田 譲治		豊中市岡町南5-18 三堀義彦方	(J2)
竹林 真一		豊中市熊野町3の66 Tel 豊中 52-2570	(Σ2)
的場 幹史		枚方市香里ヶ丘4の12の1 Tel 枚方 54-1743	(Σ2)
山田 靖則		豊中市東豊中町1の200 Tel 豊中 54-5413	(T2)
= 41年度入部 =			
中岡岡和哉		神戸市生田区山本通2の89 Tel 078-22-5762	(M2)
田村 孝		河内市鴻池1122 阪大鴻池寮 Tel 781-6680	(L1)
田村 信介		加古川市平岡町新在家1-251-8	(Σ1)
出口 信之		豊中市宮山町3の94 宮山寮	(Σ1)
松林 一男		宝塚市中山字谷ノ下2513 内山方 Tel (6) 8170	(T1)
松川 隆行		箕面市瀬川334 林学生寮 Tel みのお(26) 5067	(T2)
石原 重清		河内市鴻池1122 鴻ノ池寮	(S1)

編集後記

- ◎〈時報〉も14号を迎えたが、今迄は表紙、内容に統一がなかつたきらいがある。今号を編集するに当り理事会とも相談し、二、三新しい試みをなした。今号を漢字形とし、よりスッキリした時報に育ててゆきたい。
- ◎広告について検討した結果、あとで広告主に贈呈しなければならぬ事、交通費、本の体裁等を考えて廃止した。
- ◎理事会の希望により、名簿は時報と別にし、年末にO. B動静と共に発行することとした。
- ◎紙質など費用の点で改善出来なかつた点も多いが、今後出来るだけ改善してゆきたい。
- ◎個人山行の時間記録の詳細は部のファイルにあります。必要なのはそのファイルを参照して下さい。又、№14も2年間分となりましたが、段々記録の新らしさに欠けてきますので、個人山行の記録を選択するのに苦勞しました。現役部員の中には、「あの記録は載せて欲しかつた」と思われている人もあると思いますがあしからず。
- ◎紙面を借りて原稿をお寄せ下さつた方々に御礼申し上げます。今後共どしどし御寄稿下さい。

大阪大学山岳会 『時報』 №14

1964年4月~1965年3月

1966年9月1日発行

発行所 大阪市北区常安町36
大阪大学学生部内
大阪大学体育会山岳部

編集責任者 打出 美 樹
出雲路 敬 孝
三 好 亮

印刷所 大阪市西区江戸堀北二停西
美 研 社

〔非売品〕

大阪大学山岳部

山田靖則